

研究

史料と伊能図

二〇二二年 第九十六号

伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二二年 第九十六号

伊能忠敬研究会

湖訪取

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.96 2022



表紙解説

アメリカ議会図書館蔵  
伊能大図96松本（諏訪湖周辺）

表紙の図は南北に長い長野県の中央部付近。日本を東西に分けるフォッサマグナ西縁の糸魚川静岡構造線とさらに西日本を南北に分ける中央構造線が交差する。諏訪湖は断層によって引き裂かれた窪地にできた構造湖として知られている。

伊能忠敬は、第七次測量の往復と第八次の復路でこの地を訪れている。

第七次の測量は、文化六（一八〇九）年八月二十七日に江戸を出立し中山道を北に向かい熊谷、高崎、松井田、軽井沢を通り、下諏訪宿には、九月二十四日に到着した。二十八日までこの地に滞在し、諏訪湖の周辺を測量して、その後、塩尻から中山道を岐阜市に向かった。

九州の一次測量を終え、帰路にこの地を訪れたのは翌々年の文化八（一八一）年四月半ばで、本隊は愛知県岡崎城下から足助町を通り飯田街道、伊那街道を通り、伊那部駅から高遠に向かい、茅野に抜けた。支隊は愛知県岡崎から豊川に向かい、新城町から伊那街道を通り、鳳来寺町、飯田、平出を通り、上諏訪に出て甲州街道を江戸に向かい四月二十一日に山梨県の台ヶ原宿で一旦本隊と合流し、その後も手分けして測量を続け、五月九日に帰府した。

忠敬最後の測量の旅となる第八次の測量に出立したのは、この年（文化八年）の十一月二十五日（西暦一八一二年一月九日）だが、この地を訪れたのは、第二次九州測量の帰路で、出立から二年半後の文化十一年四月末である。第八次測量の帰路は、岐阜から高山を通り、野麦峠を越え、塩尻（洗馬）に出て、松本、長野、飯山まで糸魚川静岡構造線沿いに北上し、そこから軽井沢、秩父、川越と南下して五月二十三日に帰府した。



忠敬にとって七次、八次の九州測量は、日本列島の東の端から西の端まで直線距離でも一〇〇〇キロメートルを超える長距離の移動を伴う測量だった。

その往復の測量ルートが、西日本の地形を大きく分ける中央構造線と日本列島を東西に分けるフォッサマグナ西縁の糸魚川静岡構造線を通してしているのは偶然だろうか。

表紙の地図の範囲は、日本列島の形を形成する大断層が交差する場所である。忠敬の仕上げの測量で、伊能図の骨格である測線がここに集中するのは、忠敬の計算によるのではないかとさえ思える。

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）

菱山 剛秀

目次

96号

表紙解説

アメリカ議会図書館蔵

伊能大図96号松本（諏訪湖周辺）

菱山 剛秀

研究と話題

●伊能忠敬一行の淡路島測量

―飯屋浦く志筑浜村―

廣田 晋也 1

●史料紹介

門谷清次郎『薩隅見聞之覚書』

玉造 功 9

●江戸府内第一次測量の記録（五）

玉造 功 10

●伊能図に描かれた現存12天守（二）

犬山城

河崎 倫代 20

弘前城

室山 孝 22

彦根城

相良 文昭 24

資料

●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」

連載第二十九回

渡辺 一郎・井上 辰男

26

忠敬談話室

●イザベラ・バードが携行した日本地図についての考察

石川 清一 50

●書籍紹介

柏木隆雄著『伊能忠敬と柏木家の人々』

星埜 由尚 55

梶よう子著『藤岡屋由蔵「噂を売る男」』

大沼 晃 55

近世佐原伊能家の記録「伝家」

玉造 功 56

各地のニュース・お知らせ・新入会員紹介

石川県支部だより

伊能忠敬加能越を測る

河崎 倫代 57

石川県能登町で伊能図上呈二百年記念の企画展

映画「大河への道」

新入会員自己紹介

寺口 学 58

会則  
事務局 60  
石田 健治郎 59  
阿部野 剛 59  
事務局 59



## 伊能忠敬一行の淡路島測量

## ―飯屋浦・志筑浜村―

廣田 晋也

## ●はじめに

伊能忠敬の第六次測量隊による四国測量は、徳島藩領の淡路島最北端の岩屋浦から始まった<sup>①</sup>。文化五年（一八〇八）三月五日に岩屋浦から飯屋浦まで、三月六日には飯屋浦から志筑浜村まで測量した。その後淡路島の東海岸と南海岸、沼島を測量し、三月十六日に淡路島の福良浦から四国の測量に向かった。四国測量を終えた後、同年十一月十一日に福良浦に戻り、淡路島の西海岸と中街道を測量、十一月十七日に岩屋浦に到着し、淡路島の測量を完了した<sup>②</sup>。

飯屋浦から志筑浜村までは当時主に漁業で大変栄えていた地域で（表1）、特に志筑は漁師や商人の家が建ち並んで大坂との船の往来が多かった<sup>③</sup>。この区間にある釜口村では妙勝寺の「妙勝寺納豆」、志筑ではカマスの腸の塩辛「志筑」といった淡路島の名産品が作られていた<sup>④</sup>。

本稿では伊能大図（図1B、図2B）、伊能忠敬測量日記、伊能測量隊員旅中日記、奥地実測録巻五の原文を記載し、それらと淡路島の史料をもとに、(1)伊能忠敬測量隊の飯屋浦・志筑浜村の足跡、(2)江戸時代の佐野村と中食場所、(3)江戸時代の志筑浜村・志筑浦と宿泊場所、(4)淡路島の測量で随行した医師・喜田清庵、について述べた。

●淡路島測量（飯屋浦・志筑浜村）に関係した人物  
第六次測量隊の構成員及び徳島藩から淡路島の

測量に貢献した人物を表2にまとめた。伊能忠敬測量日記によると、三月六日の中食場所は佐野組組頭庄屋・蔭山和右衛門の家、宿泊の本陣を志筑組組頭庄屋・忍頂寺仁三郎の家、脇宿は造酒家であった島屋の菅平兵衛の家であった。組頭庄屋とは大庄屋とも呼ばれ、組下の各村浦の庄屋とともに村浦を治め、他村の普請の監督、村騒ぎの説得、もめ事の調停などを行っていた<sup>⑤</sup>。

●伊能忠敬測量日記（以降、測量日記）<sup>⑥</sup>

忠敬一行は文化五年（一八〇八）三月六日に飯屋浦から志筑浜村まで測量した。測量日記の原文は旧暦と不定時法で日時が記されているため、本節と次節では原文の後の括弧内に文献<sup>⑦</sup>の広島太陽暦四月一日に合わせて時刻を記載した。

三月六日 朝より晴天。六ツ半頃飯屋浦出立。谷村、下田村、釜口村、釜口浦、佐野村（中食和右衛門）、佐野浦（又佐野村）、中之内村、生穂村、大谷村、志筑浜村迄測。止宿（本陣、八ッ前着）、忍頂寺仁三郎（領主座敷あり）、脇管平兵衛（造酒家にて嶋屋という）。此日三原郡市村木田晴庵に對面（阿州より淡州中付添医師。下河辺病氣に付療治）。

（三月六日は現在の四月一日である。六ツ半は午前六時半、八ッは午後二時半、である。）

●伊能測量隊員旅中日記（以降、旅中日記）<sup>⑧</sup>

第六次測量は測量日記のほかに、旅中日記がある。作者は第六次測量のみ参加した柴山伝左衛門と言われている。

同六日晴天無風

一今六日六時過飯屋浦出立、夫方海辺相量り

中食ハ佐野村 庄屋蔭山和右衛門宅

泊り津名郡志筑村 造り酒や千三百も造る由也

此内家作り大造成事 造り酒や也

江戸六、七千石二も所領

四人 官（菅力）平兵衛宅

伊能 仁（忍力）頂寺仁三郎

○飯屋浦止宿打止方同六日打止宿志筑浦迄三里

三丁〇四間也

○津名郡松尾岬燈明堂ヨリ志筑浦六日止宿前迄

メ六里一十二町四間

（朝六時は午前五時半前である。）

## ●奥地実測録 巻五

奥地実測録とは、文政四年（一八二一）に「大日本沿海奥地全図」大図・中図・小図が幕府に提出された際に、その付録として提出された伊能図のデータ集である<sup>⑨</sup>。

假屋浦、三十四度三十一分半

三里三町四間

志筑浦 至志筑濱村宿所、三町九間、北極高、三

十四度二十六分半、從宿所、歴川井村、

至郡家浦、徑測、二

里二町一十五間

次節以降では、測量日記と旅中日記で表記が異なる箇所は測量日記、これらの史料の人名や地名が淡路島の郷土史料と異なる場合は淡路島の郷土史料の表記に統一し記載した。



表1 天保五年(1834) 仮屋浦から志筑浜村・志筑浦までの村浦の家数・人数等の一覧表<sup>③</sup>

村浦名	石高	家数	人数	男	女	庄屋	船数
仮屋浦	6石9斗9升1合	441	2247	1174	1073	正井 源之助 植野 百太郎	7 <sup>a</sup>
谷村	178石7斗6升9合	57	237	127	110	山本 五郎左衛門	－
下田浦 <sup>*</sup>	29石9斗8升9合	130	732	360	372	山添 喜右衛門	2 <sup>b</sup>
釜口村	1580石5斗5升5合5勺	234	1339	739	600	菅 惣兵衛	－
釜口浦	田畠高無し	30	129	72	57	能網 源三郎	9 <sup>c</sup>
佐野村	1220石5斗7升8合6勺	339	2046	1088	958	蔭山 五左衛門	－
佐野浦	田畠高無し	140	804	430	374	四郎次郎	7 <sup>d</sup>
中之内村	1981石3斗7升1合4勺	300	1326	700	626	森 宇右衛門	－
生穂浦 <sup>*</sup>	田高無し	84	353	201	152	実蔵	6 <sup>e</sup>
大谷村	879石8斗6升6合7勺	137	799	469	330	柏木 文右衛門	－
志筑浜村	2383石6斗4升9合	335	1444	783	661	忍頂寺 卯(二) 三郎	－
志筑浦	田高無し	238	1037	509	528	島田 源兵衛 角村 久左衛門	39 <sup>f</sup>

<sup>\*</sup>測量日記では下田村と生穂村と記載されているが、淡路島の郷土史料では下田浦と生穂浦と記載されている。測量日記の原文はそのまま記載したが、それ以降の箇所では淡路島の郷土史料の表記で記載している。

<sup>a</sup> 6反帆30石積から8反70石積までの船、<sup>b</sup> 6反帆30石積と15反帆140石積の船、<sup>c</sup> 4反帆30石積から12反130石積までの船、<sup>d</sup> 4枚帆40石積から8反80石積までの船、<sup>e</sup> 4枚帆30石積から8反帆70石積までの船、<sup>f</sup> 2枚帆15石積から24反帆800石積までの船

表2 伊能忠敬の第6次測量隊の構成員と徳島藩の測量に貢献した人物<sup>④-⑧</sup>

第6次測量隊		徳島藩	
隊長	伊能忠敬	徳島藩主	蜂須賀治昭
隊長・従者	藤吉	徳島藩筆頭家老 洲本城代	稲田敏植
天文方下役	坂部貞兵衛、柴山伝左衛門、 下河辺政五郎、青木勝次郎	徳島藩天文方 <sup>*</sup>	関権次郎、樋富菊郎
		人馬割元役 <sup>**</sup>	廣田直道 <sup>***</sup>
天文方下役・従者	文吉、兵助、惣助、文蔵	佐野村・中食	佐野組組頭庄屋・蔭山和右衛門
内弟子	伊能秀蔵、植田文助、久保木 佐右衛門	志筑浜村・本陣	志筑組組頭庄屋・忍頂寺仁三郎
供侍	神保庄作	志筑浦・脇宿	造酒家・島屋の菅平兵衛
棹取	佐助、善八	引縄手伝足輕	伊吉、武助、久郎、幾之助、俊蔵、新蔵、 牛之介、寅之介、富之丞、吉之助、甚蔵

<sup>\*</sup> 徳島藩の天文と気象観測を務める係<sup>④</sup>、<sup>\*\*</sup> 忠敬一行の宿や中食場所の手配、人夫や馬の調達、その他雑務を行う係、

<sup>\*\*\*</sup> 淡路島北部にある柳澤村庄屋兼柳澤組十一ヵ村組頭庄屋



## (1) 伊能忠敬測量隊の仮屋浦と志筑浜村の足跡

三月六日(四月一日)は朝から晴天で風が無かった。六ッ半頃(午前六時半頃)に仮屋浦を出立し、谷村、下田浦、釜口村、釜口浦、佐野村の順に海岸に沿って測量した。昼食を佐野組組頭庄屋の蔭山和右衛門の家(影山は誤り)でとった後、佐野浦、中之内村、生穂浦、大谷村、志筑浜村と南下し、この日の測量を終えた。宿は、志筑浜村の志筑組組頭庄屋の忍頂寺仁三郎の家(本陣)と、造酒家の島屋の菅平兵衛の家(管や官は誤り)(脇宿)で、八ッ前(午後二時半前)に到着した。忍頂寺仁三郎の家は藩主用の領主座敷がある大きな屋敷で、島屋も大きい造酒家であった。この日に淡路島測量中の付き添い医師・三原郡市村の喜田(木田は誤り)晴庵と対面し、病気であった下河辺は治療を受けている。仮屋浦から志筑浜村までの間で方位を測った場所は四か所で、柏原山、千光寺山、洲本城山、友ヶ島などを目標に測量している(表3)。測量日記や旅中日記に記載がなかったが、輿地実測録巻五によると志筑浜村の忍頂寺仁三郎の家から三町九間(約三四メートル)の志筑浦で天体観測を行っており、現在の緯度とほぼ同じ三十四度二十六分半と出している。

## (2) 江戸時代の佐野村と中食場所

天保五年(一八三四)時点の佐野村(現・淡路市佐野)の人口は二〇四六人であった(表1)。佐野村には水量が豊かな佐野川が流れ、その沿岸にいくつも水車小屋があったようで、文久三年(一八六三)七月に大洪水のため佐野川沿岸の水車小屋七戸が流失したことが記録されている<sup>⑧</sup>。水車は米を搗くために使用されていたと思われる。江

戸時代の佐野村の土産物は、佐野牛蒡として知られたゴボウ、薯蕷と言われた山芋、大粒であった麦、山椒などであった<sup>⑨</sup>。

忠敬一行は佐野組組頭庄屋の蔭山和右衛門の家で中食をとっている。蔭山氏の屋敷の場所は佐野城があった城山の東にあり、淡路名所図絵の挿絵(図1D)や天保十一年(一八四〇)時点の分間絵図<sup>⑩</sup>と見比べると、佐野小学校跡地の少し西側にあった。蔭山家の屋敷の北にあった浄満寺は後に八幡寺と合併し、現在は同じ場所で八浄寺となっている。

蔭山氏の先祖は、淡路島の史料の味地草によると、三木城主の別所長治の家臣の蔭山左近で、西阿弥陀宿村(現・兵庫県高砂市)に住んでいたが、天正六年(一五七八)羽柴秀吉が三木城主の別所長治を攻めた際に、支城の神吉城や志方城などがほぼ同時期に落とされ、左近や一族が多く討死した<sup>⑪</sup>。その後三木城も落ち、天正年間に左近の子の市郎左衛門頼重は佐野の奥土居に住むことになった。延宝二年(一六七四)に頼重の孫の加右衛門の時に庄屋を拝命された時に住居を移し、そのままだに住み続けた。現在は蔭山家の屋敷は無く、明治に入り事業を興したが恵まれず、明治の中期には蔭山家は佐野の土地を離れている。子孫については、昭和五十年頃の時点では大阪で医師として活躍されていたようであるが今は不明である<sup>⑫</sup>。

## (3) 江戸時代の志筑浜村・志筑浦と宿泊場所

天保五年(一八三四)の時点で志筑浜村の人口は一四四四人、志筑浦の人口は一〇三七人であった(ともに現・淡路市志筑)(表1)。志筑は漁師や魚の販売で生計を立てる家が多く、淡路農歌の

中に「志筑の浜は、名所でござる、後は川よ、前は海」<sup>⑬</sup>と謳われるほど美しい風景があった。志筑の名産品はカマスの腸の塩辛「志筑」で、三、四寸の小さく、淡黒い色で脂が少ないカマスの腸を使った乾燥塩辛であった<sup>⑭</sup>。他には酒、醤油、瓦などが作られていた<sup>⑮</sup>。

忠敬一行の志筑浜村での宿は忍頂寺仁三郎の屋敷(本陣)と島屋屋敷(脇陣)である。忍頂寺家の屋敷は三月六日に本陣の宿、島屋屋敷は三月六日と十一月十四日に脇陣の宿として使われた。地元の人の話では、忍頂寺家の屋敷は志筑中央東の交差点から道を三五〇メートル程進んだ場所にあった。測量日記に忍頂寺家の屋敷に領主座敷があったと記載されているように、忍頂寺屋敷絵図(図3)で領主用の「御成間」が確認できる。島屋屋敷は志筑郵便局の裏の場所にあった<sup>⑯</sup>。志筑組組頭庄屋の忍頂寺仁三郎の記録の中にも「文化五年公義天文方御役人伊能勘解由様御宿被仰付相勤候、然処右御宿相勤候節諸繕為冥加自分二仕段奇特二被思召候旨御郡代様より被仰渡候」とあり、忠敬一行が宿泊したことがわかる。

忍頂寺氏の先祖は、味地草によると、忍頂寺村(現・大阪府茨木市)にいた藤原氏二条家の親族といわれ、淡路島の尾崎村の長泉寺に移った後、明応二年(一四九三)に淡路島の竹谷村に仮住まいし、細川氏が近畿・四国を中心とする守護の時は所縁があつて淡路島の養宜館にいた<sup>⑰</sup>。その後細川氏が衰退した後は竹谷村に戻り、天正十三年(一五八五)には洲本城主の脇坂安治に仕え、税務を担当していた<sup>⑱</sup>。その後、慶長十五年(一六一〇)に庄屋を拝命、宝永四年(一七〇七)には志筑組の組頭庄屋となり苗字帯刀を許され、寛政三



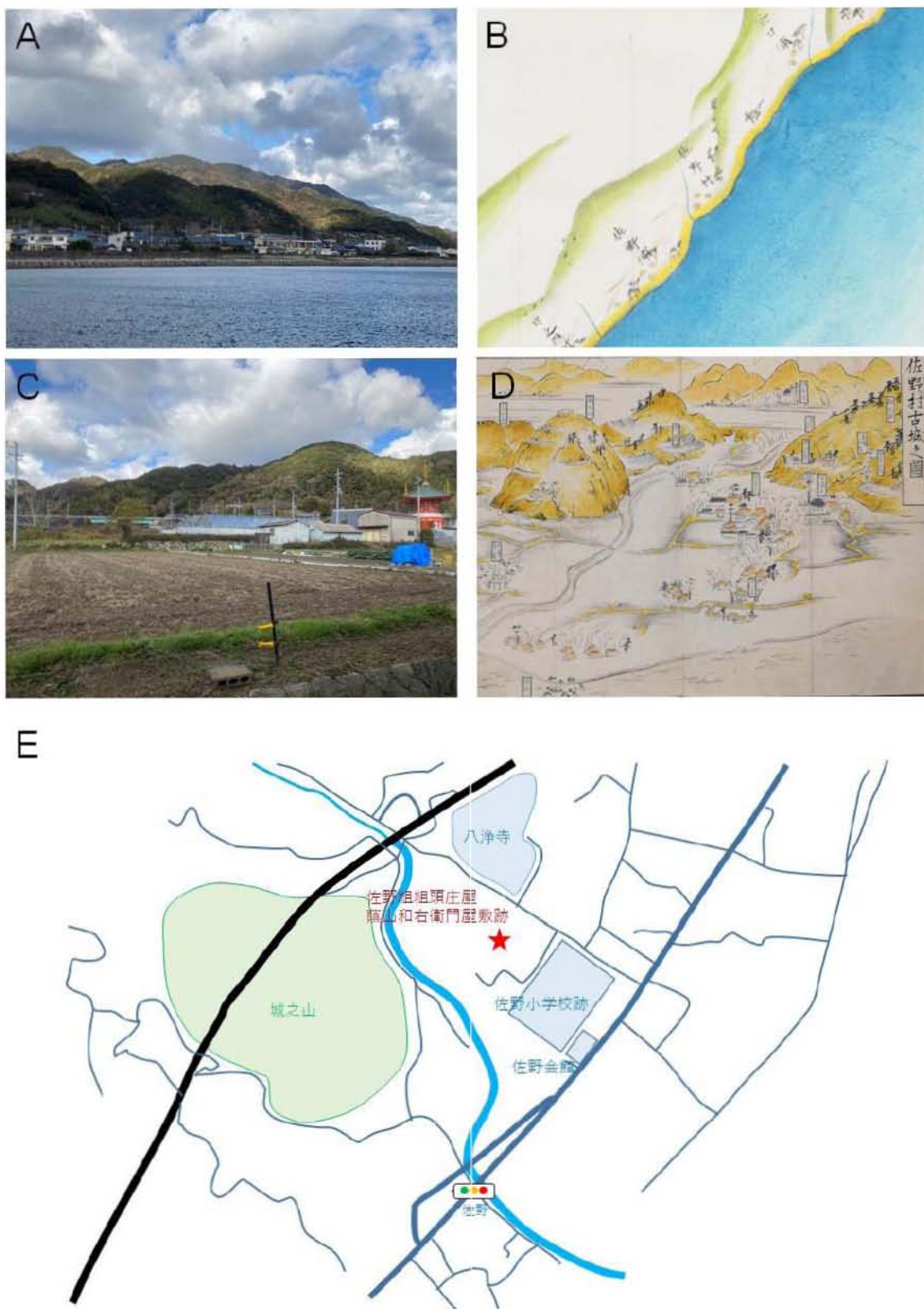


図1 佐野村と中食場所・蔭山和右衛門の家

(A) 現在の佐野の遠景、(B) 伊能大図の佐野村とその周辺（出典：国土地理院ウェブサイト「古地図コレクション」の「伊能大図彩色図」137）、(C) 佐野組組頭庄屋・蔭山家の屋敷跡。写真中央部に屋敷の石垣の一部と思われる石積みが残っていた。(D) 淡路国名所図絵（兵庫県立歴史博物館蔵）の蔭山家の屋敷周辺。屋敷は浄満寺（現在は八浄寺）の南にあった。(E) 佐野の略地図内の蔭山家の屋敷の跡地





図2 志筑浜村及び志筑浦と、宿の忍頂寺仁三郎の家（本陣）と島屋・菅平兵衛の家（脇宿）

（A）現在の志筑の遠景、（B）伊能大図の志筑浜村の周辺（出典：国土地理院ウェブサイト「古地図コレクション」の「伊能大図彩色図」137）、（C）志筑組組頭庄屋・忍頂寺家の屋敷があったと言われる場所。現在は駐車場になっている。（D）志筑浦の造酒家・島屋の菅平兵衛の屋敷跡。現在は家が立ち並ぶ住宅地になっている。（E）志筑浜村と志筑浦の略地図内の忍頂寺家の屋敷と島屋屋敷の跡地



表3 山島方位記22の仮屋浦から志筑までの各地点での方位測量結果

柏原山	洲本城山	釜口村佐野村界ヨリ六分九五後測㊟印	雨森	飯森	トマガ嶋	大石鼻	柏原山	千光寺山	埴山 横尾ト言	右測ヨリ一寸七分後ニ測㊟印	釜口村月山	柏原山 是迄ユツルハ	雨森	飯森	金剛山	尼上	武庫山	一ノ谷山	同三月六日仮屋浦止宮前始
午	午		辰	辰	巳	午	午	未	未		申	午	辰	辰	卯	寅	丑	丑	
大半	大半		大半	大半	大半	大半	大半	大半	大半		大半	大半	大半	大半	大半	大半	大半	サ	
一三三五	一六八		一三五	二五	二四二五	五三	一七四	九三	一二四五		一三五	一八三	二四一	一六五	一一	二九一	一一一八	五四五	
乙	乙		小方	小方	小方	小方	小方	小方	小方		乙	サ	乙	乙	サ	乙	サ	乙	
一二五五	一五五		一三四	二五	二四三	五五	一七三	九三	一二四		一一	一八二	二三五	一六三	一	二九	一	五四五	
サ			サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ		サ		サ	サ		サ			
一二四五			一三四	二五	二四四	五四	一七二	八五三	一二二五		一五五		二四五	一七		二九二五			
	千光寺山	大町山松	大谷村志筑濱村界ニテ測㊟印	雨森	飯森	苦ヶ嶋高	トマガ嶋ハナレ	大石岬	柏原山	洲本城山	千光寺	埴山	右測ヨリ一寸六六一六六ノ後㊟印ニテ測	雨森	飯森	トマガ嶋ハナレ	トマガ嶋高	トマガ嶋ハナレ嶋	大石鼻
	未	申		辰	辰	巳	巳	巳	午	午	未	未		辰	辰	巳	巳	巳	午
	サ	サ		大半	大半	大半	サ	大半	大半	大半	大半	大半		大半	大半	大半	大半	大半	大半
	六三三	二六		四四	一一五	一四四五	一六一	二七五	一一五五	二六三	九五	一三三五		七三五	一四二	一一五五	一七四	一八五三	五
	イ	イ		イ	サ	サ		サ	サ	サ	サ	サ		サ	イ	サ	イ	イ	イ
	六四五	二五四五		四一五	一	一四四		二七三	一二二五	二六五	九	一三五		七二五	一四	一一五	一七二五	一八二	正
				サ		イ					イ	イ		イ	サ		サ	サ	
				四		一四三					九三	一三一		七一	一四		一八	二二四	



年（一七九一）には庄屋最高の身分の小高取になっている。忍頂寺氏は京都の公家とも接点があり、正徳二年（一七一一）に京都の外山中納言に「志筑」を手土産にしている、外山中納言からの札状にも美味であったことが触れられていた<sup>⑧</sup>。忍頂寺氏は、幕府役人の御宿を勤めたこと、徳島藩主の淡路巡国のたびに御宿を勤めていたこと、志筑は淡路島の中央付近にあるため、諸士往來の宿や休息所に多く使われていたこと、がわかっている<sup>⑨</sup>。現在は忍頂寺家の屋敷は無く駐車場になっている。平成二十年頃の時点であるが、子孫の本来の方は東京にいらつしやるようである。

島屋の菅平兵衛は造り酒屋で、旅中日記に「此内家作り大造成事」とあるように、当時「志筑島屋を沖から見れば 外は白壁 内小判」と言われたほど、屋敷は大きく繁盛していた<sup>⑩</sup>。島屋は藩の御宿御用も勤めており、伊能忠敬一行の三月と十一月の宿や幕府の巡見使等の宿に使われた（表4）。旅中日記の「江戸六、七千石も所領」については情報が見つからず確認できていない。菅家は寛政元年（一七八九）に苗字帯刀を許されている<sup>⑪</sup>。

菅平兵衛の先祖は、備前金川の生まれで、姫路藩主だった池田輝政の第三子の池田忠雄の時に従って淡路に来島し、徳島藩主が蜂須賀家に替わった後もそのまま志筑に住み続けた。志筑に移り住んだ初代の平兵衛は正保三年（一六四六）に没しているが、当時武士身分でなくては付けなかった仏号が付いているため、武士の土着したものと考えられている。その後二代平兵衛と三代平兵衛重規は船を持ち廻船業を行い、重規の頃より造酒を始め明治になっても続けていたようである。

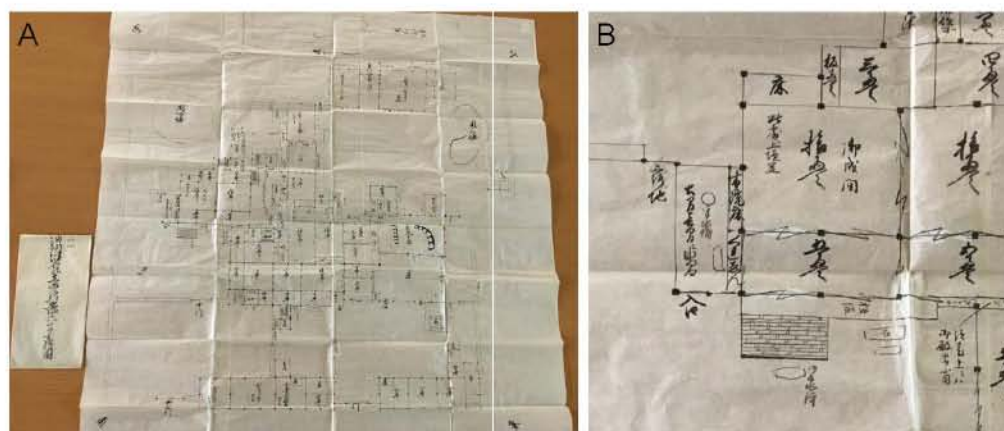


図3 志筑組組頭庄屋・忍頂寺家の屋敷図（国文学研究資料館蔵）

（A）屋敷の全体、（B）写真（A）の中央左側に十畳の御成間（領主座敷）が確認できる

表4 志筑浦の島屋が御宿御用を勤めた事例<sup>⑫</sup>

延享三年（1746）	幕府巡見使御宿（御目付様のうち神谷佐内宿）
宝暦十一年（1761）	幕府巡見使御宿
寛政元年（1789）	幕府巡見使御宿（目付細井隼人以下35人と徳島藩家老）
文化五年（1808）	天文方御役人（測量方）御宿
文化九年（1812）	御姫様御宿
文化十年（1813）	徳島藩主御宿
文政三年（1820）	徳島藩家老池田大隈（八千石）有馬入湯御宿
文政五年（1822）	藩主御成り
天保九年（1838）	幕府巡見使三枝平右衛門ほか32名御宿
天保十二年（1841）	幕府廻船改め役人御宿
安政二年（1855）	幕府海岸見分勘定奉行大久保右近将監様御宿
安政六年（1859）	藩主御宿



#### (4) 淡路島の測量で随行した医師・喜田晴庵

喜田晴庵は曾祖父の喜田台賢から代々続く市村(現・南あわじ市市「いちいち」)の医師で、測量隊が来島の際に随行した<sup>80</sup>。台賢は京都の名医の山脇東洋(通称は道作)に弟子入りし医学を学んでいる。文化八年(一八一二)の棟付帳には「一、老家 喜田晴庵 歳四十三 (略) 文化五年公義天文方御役人様御越被遊候砌 苗字帯刀御免被仰付 附廻御用相勤 且又相応之居宅相構居申ニ付 太守様当地へ被遊御入候節 度々御宿仕」とあり、晴庵が四十才の時に苗字帯刀が許され、測量隊の随行を勤めたこと、屋敷が立派で徳島藩主も宿に使ったことがわかる。ただ晴庵には実子がなく養子を迎えたが、その子は軍人となり郷土を離れ、その後の行方はわからない。また屋敷跡は明治末期には藪になっていたようである。

#### ●おわりに

伊能忠敬測量隊は文化五年(一八〇八)三月四日に淡路島最北端の岩屋浦に到着し、三月五日に岩屋浦から飯屋浦まで測量した後、三月六日に飯屋浦から志筑浜村まで測量した。三月六日の中食をとった佐野組組頭庄屋の蔭山家の場所、宿の本陣の志筑浜村の忍頂寺家の場所、脇宿の志筑浦の島屋の場所はそれぞれ特定できた。さらに忍頂寺家の屋敷図は現存し、測量日記で触れられていた領主座敷も確認した。ただいずれも子孫の方はすでに土地を離れておりお会いすることはできなかった。淡路島の測量に随行した市村の医師の喜田晴庵は曾祖父から代々続く医師であることがわかったが、実子がなく養子を迎えて子ができたが軍人となって郷土を離れた後行方がわかっておらず、

屋敷跡は明治末期には藪になっていたようである。今後は文化五年三月七日以降の淡路島の測量について掘り下げていきたい。

#### ●文献

- ① 渡辺一郎監修『伊能忠敬測量日記 第十二巻 解説』イノベディアをつくる会(二〇一七)
- ② 渡辺一郎監修『伊能忠敬測量日記 第十三巻 解説』イノベディアをつくる会(二〇一七)
- ③ 北山學『銘細 郡村仮名附帖抄録版』友月書房(二〇一一) 四四〇六九頁
- ④ 曉鐘成『淡路國名所圖繪 卷之一』近藤雄太郎(一九三五) 一ノ四十八
- ⑤ 仲野安雄『重修 淡路常磐草』臨川書店(一九九八) 一〇五〜一一五頁
- ⑥ 渡辺一郎監修、前掲書①
- ⑦ 伊能忠敬研究会『忠敬と伊能図』アワプランニング(一九九八) 一一六〜一二〇頁
- ⑧ 渡辺月石『淡路堅磐草付蝦夷物語下巻』臨川書店(二〇〇三) 三二一〜三二二頁
- ⑨ 高田豊輝『阿波近世用語辞典』高田豊輝(二〇〇一) 一五四〜一五五頁
- ⑩ 津名町史編集委員会『津名町史 本編』兵庫県津名郡津名町(一九八八) 一〇二〜一〇一六頁
- ⑪ 渡辺一郎監修、前掲書①
- ⑫ 保柳睦美『江戸時代の時刻と現代の時刻』地学雑誌 八六(五)(一九七七) 二七三〜二八四頁
- ⑬ 安永純子『伊能測量隊員旅中日記(上)』について『愛媛県歴史文化博物館 研究紀要第六号(二〇〇一) 九九頁
- ⑭ 前田幸子『奥地実測録を読む』伊能忠敬研究 第八十六号(二〇一八) 十一〜十九頁
- ⑮ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、四一三〜四一六頁
- ⑯ 小西友直、小西錦江編『味地草 第一冊』名著

出版(一九七二) 六八二頁

- ⑰ 百周年記念誌編集委員会『佐野小学校創立百周年記念誌』津名町立佐野小学校(一九七八) 一六頁
- ⑱ 小西友直、小西錦江編、前掲書⑩、七〇二〜七〇三頁
- ⑲ 百周年記念誌編集委員会、前掲書⑩、一二頁
- ⑳ 藤井容信、藤井彰民『淡路草 上巻』名著出版(一九七五) 八二頁
- ㉑ 寺島良安『和漢三才図会7』平凡社(一九八七) 一五六〜一五七頁
- ㉒ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、三二〇〜三二一頁
- ㉓ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、四〇七〜四一二頁
- ㉔ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、四〇五〜四〇六頁
- ㉕ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、一一五〜一一四頁
- ㉖ 小西友直、小西錦江編、前掲書⑩、五三八〜五三九頁
- ㉗ 堂山達之介『ふるさと津名町誌概要』志筑印刷株式会社(一九八二) 二七頁
- ㉘ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、三二〇〜三二一頁
- ㉙ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、一〇〇八〜一〇〇九頁
- ㉚ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、三九六〜三九九頁
- ㉛ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、四〇一〜四〇三頁
- ㉜ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、四〇一〜四〇三頁
- ㉝ 日下初子『喜田一統の系譜——淡路島福永村——』大野印刷株式会社(一九七四) 一三七〜一四〇頁



## 史料紹介

## 門谷清次郎『薩隅見聞之覚書』

玉造 功

はじめに

門谷清次郎の『薩隅見聞之覚書』は駒井乗邨の『鶯宿雑記』に収められており、国会図書館デジタルコレクションで原文を閲覧することが出来る。測量隊員が残した記録は第六次測量の柴山伝左衛門の『旅中日記』が知られているだけであり、貴重な史料といえよう。

覚書には駒井乗邨の次のようなコメントが付されている。右の書は、文化九年に測量御用の伊野（伊能の誤記）勘解由（忠敬の隠居後の通称）の門人の門谷清治郎が、種子島から鹿児島に帰着して二十五日に留守宅に出した書状のうち、薩摩と大隅で見聞した内容であると記している。忠敬が娘の妙薫宛に出した書状も同じ日付けであり、『測量日記』の五月二十六日に江戸行きの書状を薩摩藩側に渡したという記事とも符合している。

覚書の内容は一見したところ、家族宛の私的な内容もなければ、測量の様子を報告するものでもないようで、あくまでも薩摩と大隅（屋久島、種子島）の概要と見聞記のようである。鹿児島城下からは箱田良助、尾形謙二郎、保木敬蔵、加藤嘉平次が妙薫に書状を出している。彼らもそれぞれの家族宛てに書状を出していたはずである。測量隊員は、家族宛とともに、留守宅を経由して所屬長宛、友人知人宛にも書状や見聞記を送っていたのではないだろうか。

## 門谷清次郎

門谷清次郎常久の名が登場するのは第五次測量

からである。文化二年八月十一日に景保が受け取った忠敬の書状（『高橋景保御用日記』会報六十六号）の「金助病氣並び内弟子父大病に付帰国」という記事や、『測量日記』の文化二年八月二十六日の「門谷は市野と共に帰府に付て、僕伊兵衛を侍に致し手伝にす」という記事から、門谷は忠敬の内弟子であり、忠敬の供侍として測量に参加していたことがわかる。

文化四年五月六日付の大川治兵衛に宛てた忠敬の書状（『伊能忠敬未公開書簡集』）には、第五次測量後の江戸黒江町の隠宅での地図仕立ての様子が記されている。その中に「内弟子隼太、秀蔵、慶助、伊兵衛、門谷五人」とあり、門谷は測量だけでなく、地図仕立にも従事している。

第六次測量以降の『江戸日記』『測量日記』に門谷の名はない。第八次測量からは天文方の手付下役として再登場し、第九次伊豆七島測量、第二次江戸府内測量にも参加している。

絵が得意であったようで、文化四年一月二十一日付の高橋景保が忠敬に宛てた書状（『埼玉大学紀要十七号』、『天文暦学諸家書簡集』所収）に絵図物仕立てのため画工の代わりに門弟の門谷清次郎を二日ほどお借りしたいと依頼している。ただし門谷は絵師ではない。いうまでもないが忠敬が内弟子に教えたのは測量地である。第五次測量中の『測量日記』の文化二年六月八日の記事に忠敬、市野、門谷が止宿に残って推算したとあるように推算の要員でもあった。絵の才能は僅絵図や地図仕立でも発揮されたことであろうが、あくまでもそれは余技である。御家人の子弟で天文方の手付下役になったということは、坂部貞兵衛、市野金助、下河辺政五郎等と同様に、和算の人脈

に連なる人物ではないのだろうか。

門谷についての記録の最後は、シーボルト事件に連座して処罰されたことである。『鶯宿雑記』巻二五一にも「天文方高橋作左衛門御仕置一件」という記事があり、その中に、

江戸十里四方追放

御細工所同心組頭改方勤方八郎右衛門倅  
同断手付暦作測量御用出役

門谷清次郎 四十七

と記載されている。

## 『鶯宿雑記』

『鶯宿雑記』は駒井乗邨（号は鶯宿）が約三十年間にわたって書き留めた六百巻に及ぶ叢書である。駒井は久松松平家の家臣で、松平定信の側近として約三十年間も仕えた。『鶯宿雑記』の項目を見ると、駒井は市井から幕閣に至るまで様々な情報に接する立場にいたようである。『鶯宿雑記』の中でも有名なのは「よしの冊子」である。「よしの冊子」は定信の側近であり駒井の和歌の師でもあった水野為長が天明寛政期の江戸城内や市中の風聞を収集して定信に伝えたもので、若年寄堀田正敦に関するものは会報八二号で前田幸子会員が紹介している。

『鶯宿雑記』は国会図書館デジタルコレクションで公開されているとはいえ、あまりにも膨大であるため、個々の内容に近づくことは困難を極めていたが、最近、『鶯宿雑記』ウェブ索引<sup>1</sup>が国会図書館のリサーチ・ナビで公開された。「か」のボタンをクリックするとか行の項目一覧があらわれ、「門谷清次郎薩隅見聞之覚書」をクリックすると、『鶯宿雑記』巻四六三の該当ページを開くことが出来る。どなたか翻刻を御願います。



# 江戸府内第一次測量の記録(五) — 文化十二年二月九日の『日記』 —

玉造 功

二月九日の測量は千住宿と江戸府内を繋ぐものであった。千住宿は第一次測量の出発・帰着、第二次測量の帰着、第三次測量の出発地点である。  
図1に朱線で加筆したように、日本橋北詰の室

二月九日晴天 大通 室町一丁目  
入口木戸、當月三日残し  
室町一丁目  
右横町安針町という  
右横町小田原町という

二月九日 晴天 大通 室町一丁目  
入口木戸、當月三日残し  
室町一丁目  
右横町安針町という  
右横町小田原町という

左横町 室町二丁目  
右瀬戸物町という  
室町三丁目  
右横町  
左本町二丁目  
右本町三丁目

左横町 室町二丁目  
右瀬戸物町という  
室町三丁目  
右横町  
左本町二丁目  
右本町三丁目

奥州街道追分  
左御堀端迄本町二丁目通  
四町ばかり御堀端は一丁目とす  
左 十軒店

奥州街道追分  
左御堀端迄本町二丁目通  
四町ばかり御堀端は一丁目とす  
左 十軒店

左石横町  
左横町三丁目  
右本町三丁目  
左右共新道  
左側本石町  
右側本石町三丁目  
横町

左石横町  
左横町三丁目  
右本町三丁目  
左右共新道  
左側本石町  
右側本石町三丁目  
横町

又右横町三丁目新道という  
右本銀町三丁目  
本銀丁  
右三丁目  
右横町本銀町三丁目  
左二丁目  
左横町本銀二丁目という  
今川橋  
渡巾五口(間力)是より

又右横町三丁目新道という  
右本銀町三丁目  
本銀丁  
右三丁目  
右横町本銀町三丁目  
左二丁目  
左横町本銀二丁目という  
今川橋  
渡巾五口(間力)是より

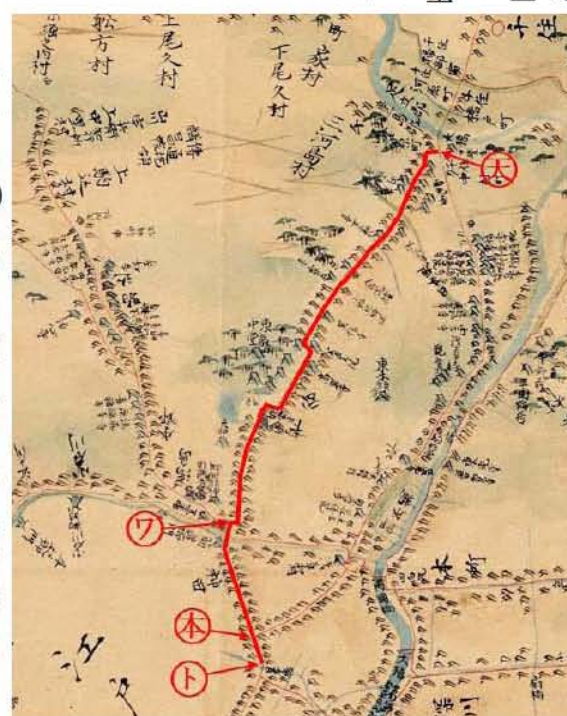


図1『大日本沿海輿地図』に加筆

町入口の①印から測量を始めた。日本橋北詰は中山道と奥州街道(宇都宮までは日光街道と重複する)の始発点である。②印で奥州街道が東側に、③印で中山道が西側に分岐する。測量隊は上野山下を経て下谷道を進み、千住大橋の手前④印で奥州街道に測線を繋いだ。

①印：一月三日の『日記』に、測量隊は南側から日本橋を渡り「室町老町目入口打止メ、①印ニ畢ル」と記されている。図3に描かれた室町一丁目入口の木戸の柱のどちらかであろうかなお画面左下の木戸に続くのが魚河岸である。

駿河町：図4の上部に「日本橋通り北の方なり。この辺すべて繁華なるうへに、三井前後の店殊に名高く、見世のかかり、土庫(ぬりごめ)のさま実に目を驚かせり。この所にて西の方を臨めば富士が嶺正面にして、四時絶景なり。ゆえに駿河町の名あり」と記されている。越後屋、奥に江戸城、遠景に富士山という組合せは、江戸繁栄を象徴する画面であった。





図3 日本橋北詰（広重『日本橋真景并二魚市全図』部分・加筆）



図2 『江戸実測図(南)』に加筆

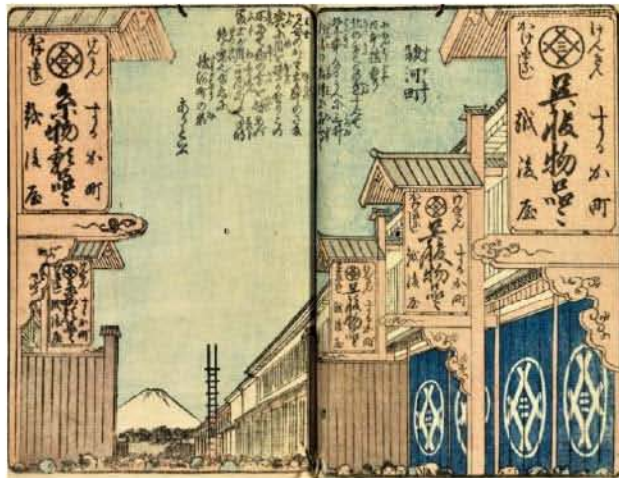


図4 駿河町（広重『絵本江戸土産』）



図5 十軒店雑市（『江戸名所図会』部分）

『江戸名所図会』には、「神田須田町より南へ今川橋、日本橋、中橋、京橋、新橋を経て金杉橋あたり迄」を総称して「通町」といい、越後屋を筆頭とする表店が連なる空間であった。

・浮世小路：室町三丁目東側の伊勢町堀の掘留までの短い横町である。浮世小路には高級料亭百川があった。忠敬とも交流のあった漢詩人の菅茶山は出府のおり百川で開かれた書画会に招かれて、亀田鵬斎、太田南畝、大窪詩仏、菊池五山らと交友を深めている。

・奥州街道追分：①印で奥州街道・日光街道は右折し、浅草をへて千住宿へと向かう。

・十軒店：名前の通り長さ二十間ほどの小さい町であった。図5の『江戸名所図会』の本文では、桃の佳節には雑市が立ち、内裏雛などの店が軒端を並べ、端午の節句には五月人形の市が立ち、年の暮れには春を迎える破魔矢・羽子板を商い、「その市の繁昌言語に述べ尽すべからず。

実に太平の美とも云はんかし」と記している。

・本石町三丁目：本石町三丁目北東角地には長崎屋という菓種問屋があり、オランダ商館長一行が江戸へ参府した際の定宿であった。

文政九（一八二六）年にシーボルトはオランダ商館長の江戸参府に同行して長崎屋に滞在した。『江戸参府紀行』（呉秀三訳）の旧暦四月一日の記事に「天文方グロビウス（高橋景保）の訪問あり。江戸の地図及び薩吧連（サハリン）の立派なる地図を齎（もた）らして示せり」とある。「江戸の地図」は江戸府内図であろうか気になる所である。なお、斉藤信の訳文では「蝦夷・樺太の素晴らしい地図」としている。

旧暦四月九日の記事には「グロビウス来り。日本のいと美事なる地図を示し、余のために之を周旋すべしと約せんが、後に之を果せり」とあり、シーボルト事件の発端が記されている。



<p>神田元乗物町 左右横町、又右横町の左鍛冶町 鍛冶町一丁目 右一丁目 御石橋 小流</p>		<p>神田元乗物町 左右横町、又右横町の左鍛冶町 鍛冶町一丁目 右一丁目 御石橋 小流</p>	
<p>左右横町 右一丁目 鍛冶町二丁目 左横町 新石町 左横町 右須田町 右横町 同名須田町</p>		<p>左右横町 右一丁目 鍛冶町二丁目 左横町 新石町 左横町 右須田町 右横町 同名須田町</p>	
<p>二丁目 右横町 左角 松平伊賀守屋鋪 筋違御門 張御番所 冠木御門 筋違橋 渡長 一昨七日残し 印 繫</p>		<p>二丁目 右横町 左角 松平伊賀守屋鋪 筋違御門 張御番所 冠木御門 筋違橋 渡長 一昨七日残し 印 繫</p>	
<p>十二町四十二間一尺 又飛て 外神田 旅籠町 中山道追分 七日残し 日光御成街道 測量</p>		<p>十二町四十二間一尺 又飛て 外神田 旅籠町 中山道追分 七日残し 日光御成街道 測量</p>	
<p>左旅籠町一丁目 右中町 左側旅籠町 右須田町代地 右横町須田町の代地という 右側ばかり</p>		<p>左旅籠町一丁目 右中町 左側旅籠町 右須田町代地 右横町須田町の代地という 右側ばかり</p>	
<p>小柳町代地 右側ばかり 九軒町 松下町一丁目代地 左側ばかり 平永町代地 右横町 字なし 右側 柳原岩井町代地 左 右 共</p>		<p>小柳町代地 右側ばかり 九軒町 松下町一丁目代地 左側ばかり 平永町代地 右横町 字なし 右側 柳原岩井町代地 左 右 共</p>	



図6 下駄新道(『江戸名所図会』部分)

・鍛冶町：鍛冶町の西側の裏通りの下駄新道には表通りの大店とは異なる空間が広がっており、図6のように下駄職人や販売業者が集まっていた。図中の店の小上がりでは、店の主であろうか、そろばんを持つて、束ねた鼻緒を前にして客と商談をしている。土間では職人が上半身裸に鉢巻姿で鼻緒を通す穴を錐で開けている。店の前には穴を開けられた下駄が重ねられ紐で結わえられている。路上にはおもちゃを持った子供を背負う女性、其の視線の先では職人が女物の下駄に漆を塗りながら話しかけている。

・御石橋と小流：『江戸名所図会』に、神田鍛冶町の通りを横切つて東の方へ流れる溝を、俚諺に逢初川あるいは藍染川と呼ぶとある。図7の「鍛冶町一」と「町目」の文字の間に描かれた「小流」が藍染川であろう。図7をよく見ると「御石橋」も描かれている。

・新石町：容積の単位の石に由来するとされ「イシ」ではなく「コク」と読む。

・松平伊賀守屋鋪：信州上田藩松平伊賀守忠学





図7 『江戸実測図(南)』に加筆

の上屋敷。江戸府内測量の頃は図8の左上の火の見櫓のある屋敷がそれであった。

・津田家：図7の朱枠で囲んだ津田壮之助は佐原村の領主である。津田家は微禄の御家人であったが、壮之助の祖父第四代信之の姉の知穂（千穂）が將軍徳川家治の側室として嫡男の家基の生母となったことから六千石の大身旗本に出世し、神田佐柄木町に一七八七坪余の屋敷を、小日向鼠坂上に下屋敷一一九〇坪余を拝領した。佐原村は安永六（一七七七）年に津田家の知行地となったので、忠敬は村役人として津田家屋敷を度々訪れている。忠敬は幕臣となつてからも測量の出立や帰府の挨拶、年始や暑中見舞いに佐柄木町に足を運んでいる。

・筋違御門：筋違御門の前は図8のように火除地の広場となっており、八方に道が通じたことから「八辻原」「八ツ小路」などと呼ばれた。

・印始め：⑦印からの印までは二月七日に測量しているので測量せずに進み、⑧印から測量

を再開した。⑧印から西側に中山道と日光御成街道が分岐する。

・日光御成街道と御成道：この記事や二月七日の記事から見ると、『日記』では⑧印の追分から下谷・上野山下を経て千住で日光街道に合流する下谷道も「千住通日光御成街道」として將軍の日光社参路としている。しかし、日光社参の將軍は岩槻城を初日の宿所とするため、岩槻城を通らない千住経由の日光街道を御成街道（御成道）とすることはない。筋違御門から下谷を経て將軍家菩提寺の上野寛永寺への社参路も「下谷御成道」と呼ばれるので混同したか。

・代地：図7の下谷御成道の東側は須田町代地など代地が続く。寛政五年の大火で湯島・下谷・神田から日本橋河岸まで焼失した際に、筋違橋から和泉橋までの神田川兩岸の町々が带状に火除地として上地された。代わりに御成道の東側の旗本屋敷を上地し、そのあとを各町の代地として与え、町奉行支配地に改めたことによる。

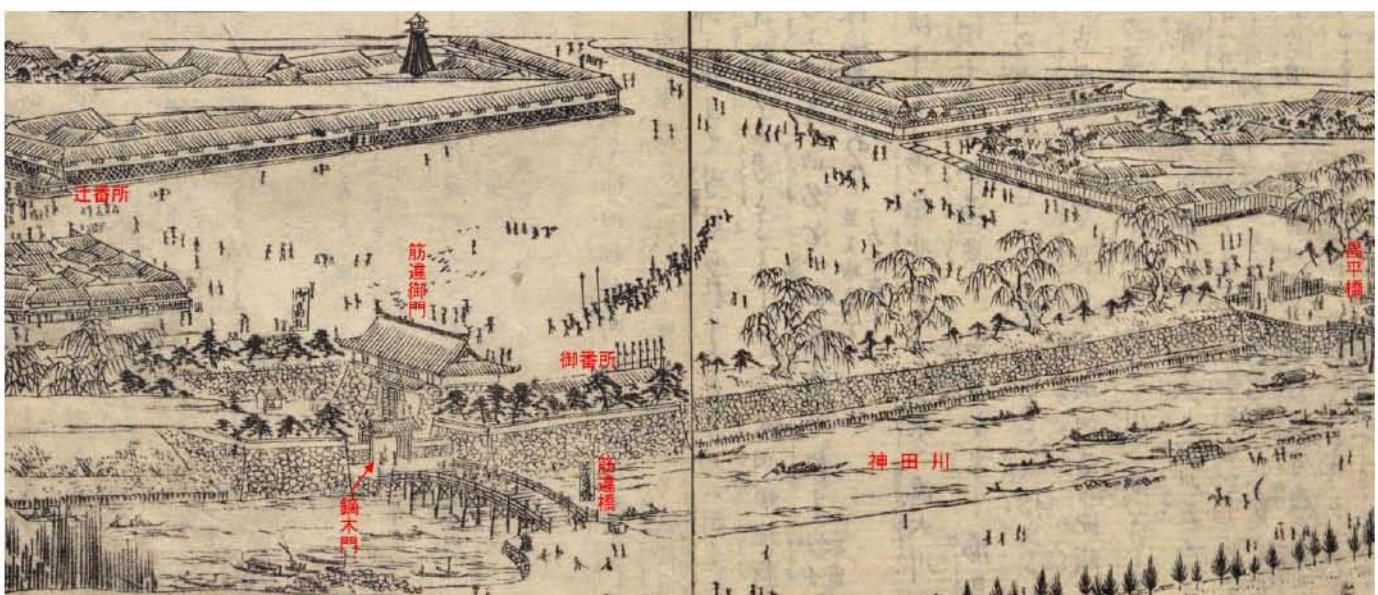
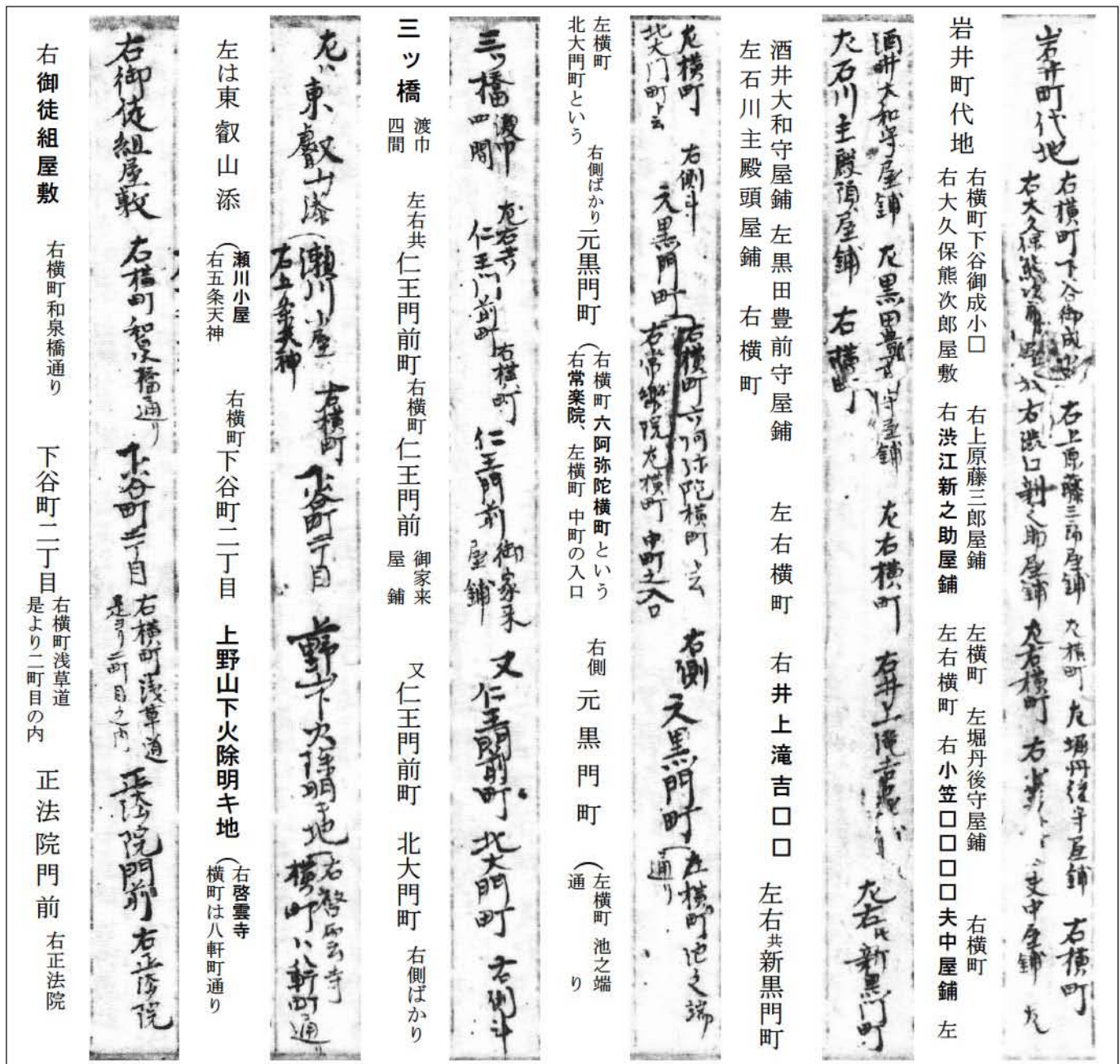


図8 筋違八ツ小路(『江戸名所図会』部分・加筆)





岩井町代地を過ぎると下谷御成道の両側は武家屋敷が続く。西側には越後村松藩の堀丹後守直庸の上屋敷、安房勝山藩の酒井大和守忠嗣の上屋敷、上総久留里藩の黒田豊前守直候の上屋敷、伊勢亀山藩の石川主殿頭総佐の上屋敷が続く。石川総佐は自らオランダ語などを学び、藩内で蘭学振興をはかったという。その影響もあってか、『江戸日記』の文化十二年九月二十五日の記事に「勢州亀山藩由良溪右衛門入門、肴代金二百疋」とあり、伊勢亀山藩から忠敬のもとに入門者があった。前年の三月十七日に由良溪右衛門は亀山代官として第八次測量の帰路の忠敬のもとを訪れている。

新黒門町からは町家となる。下谷の広小路に入ると東側に図10の松坂屋が店を構えていた。暖簾には松坂屋の商標「いとうまる」が染め抜かれていた。下谷広小路は明暦の大火後に寛永寺の門前に火除地として設けられた。なお、下谷は台地である上野に対する低地という意味での名称である。

・**渋谷新之助屋鋪**：渋谷新之助直影は忠敬が所属する小普請組の組頭であり、『江戸日記』に頻繁に登場する。様々な書類の提出、出立や帰着の届、暑中見舞や新年の挨拶等忠敬が度々訪れたのがこの屋敷である。渋谷は三百俵の蔵米取りで、この屋敷は二百九十三坪あった。

・**小笠原大膳大夫中屋敷**：図9のように豊前小倉藩の小笠原大膳大夫忠固の中屋敷である。

・**井上滝吉**：下総国高岡藩一万石の上屋敷。井上瀧吉は江戸府内測量の二ヶ月前に筑後守に叙任されていたが、『日記』と図9で表記が異なっていた。虫損箇所は「屋鋪」であろう。

・**常楽院と六阿弥陀横町**：春秋の彼岸に下町の六ヶ寺の阿弥陀様を巡拝する六阿弥陀詣が流行した。『東都歳事記』では五番の常楽院から始め





図9『江戸実測図(南)』に加筆

ることを勧めている。「六つに出て六つに帰る六  
あみだ」というように、明け六つから暮れ六つ  
までの一日がかりの巡拝であつた。

・三ツ橋：『御府内備考』によると不忍池から流  
れる忍川に三つの橋が並んでいるので三橋と呼  
ぶ。中の橋は御成道で幅が六間余。

・瀬川小屋：『御府内備考』によると瀬川屋敷  
は御連歌師瀬川昌惇の拝領町屋敷。

・上野山下火除明き地：山下は東叡山の下とい  
う意味。元文二（一七三七）年の火災の後に火  
除け地となつた。町屋は置かれず、床店、よし  
ず張の水茶屋、見世物小屋が立ち並び、両国広  
小路と並ぶ歓楽地となつた。図11の左側の「か  
るわざ」は高い櫓に幟がはためている。近く



図10 下谷広小路(広重『名所江戸百景』)

の茶屋では「あわもち」を商っている。「ものまね」の小屋の舞台には二人の芸人がたち、「講尺（釈）」の小屋の手前側の高座に座っているのが講釈師であろうか。「見世物」の小屋の看板に描かれているのは何であろうか。「曲馬」の見物席は二階建てである。路上の「居合拔」を見物人が遠巻きにしている。

・啓雲寺 … 『寺社書上』で確認すると啓運寺の誤記である。

・御徒組屋敷 … 御徒組は十五組からなり、各組は御徒頭一名、組頭二名、御徒二十八名で、將軍の御成の行列を先導・警護した。組ごとに大縄地として一括して屋敷地が与えられ、下谷には御徒組の組屋敷が集まっていた。

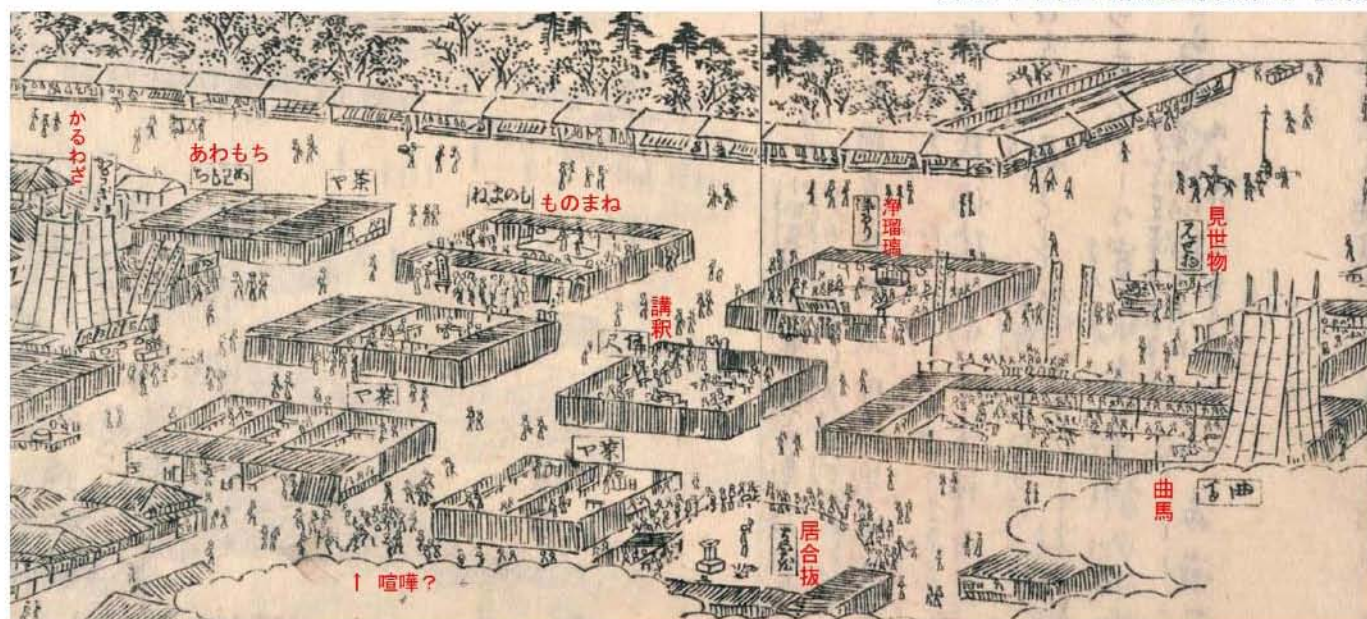


図 11 山下（『江戸名所図会』部分・加筆）



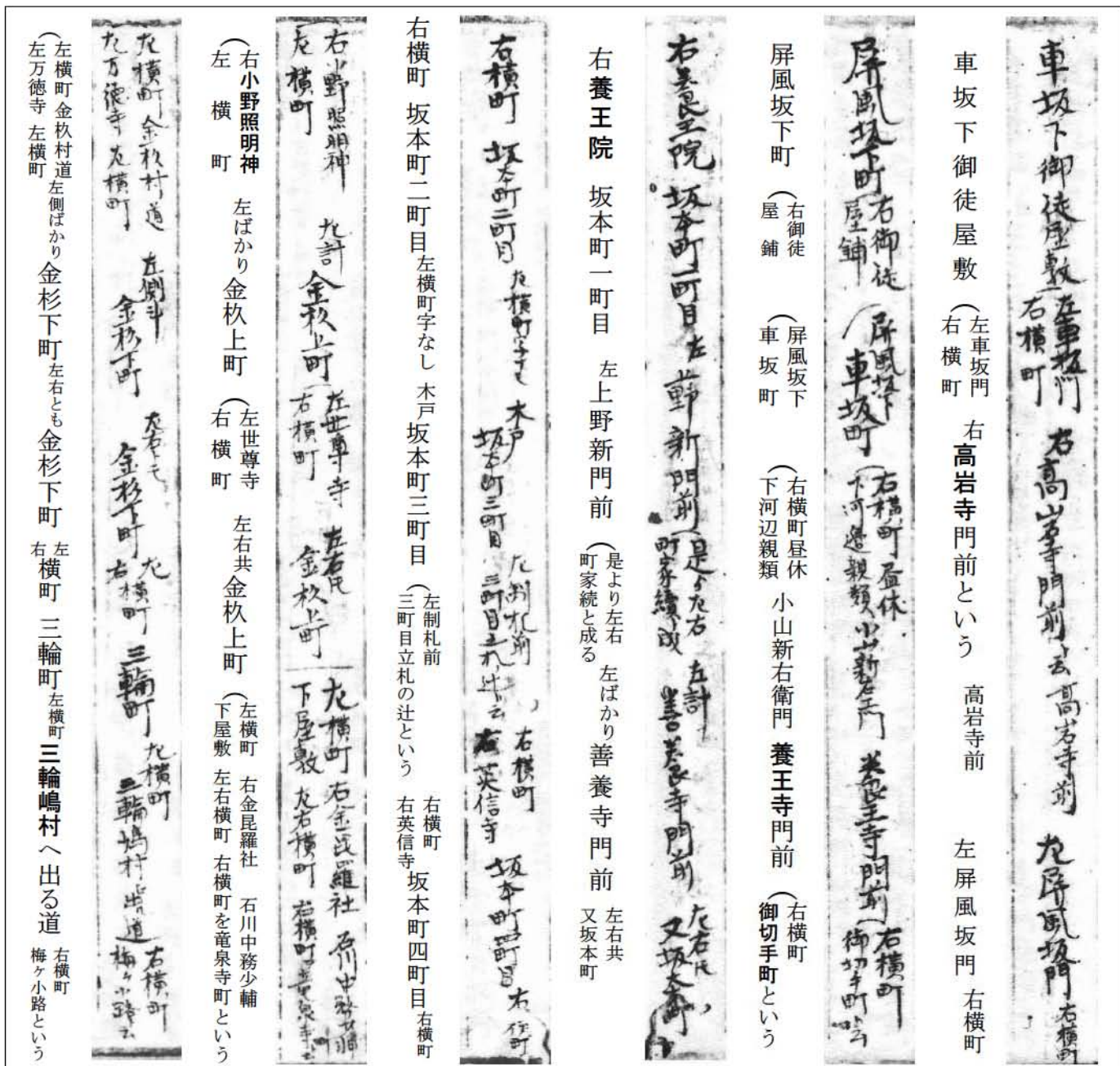


図13 上野惣絵図  
(『江戸城内并芝上野山内其他御成絵図』)

繁華な上野山下火除明地が終わると、図12の測線の西側には堀や塀で隔てられた寛永寺の子院群、東側には御徒組屋敷や寺院が続く。  
東叡山寛永寺は江戸城鎮護のため鬼門に当たる上野忍岡の地に開かれ、徳川將軍家の祈禱所・菩提寺として大名並みの寺領一万千七百九十石を

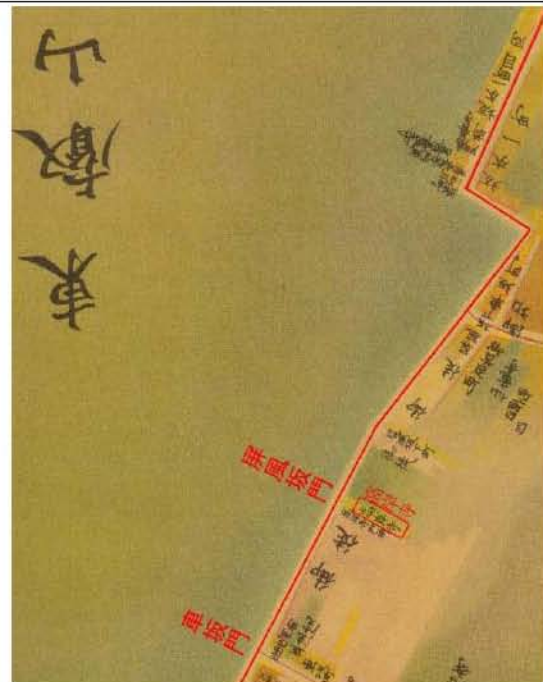


図12『江戸府内図(北)』に加筆



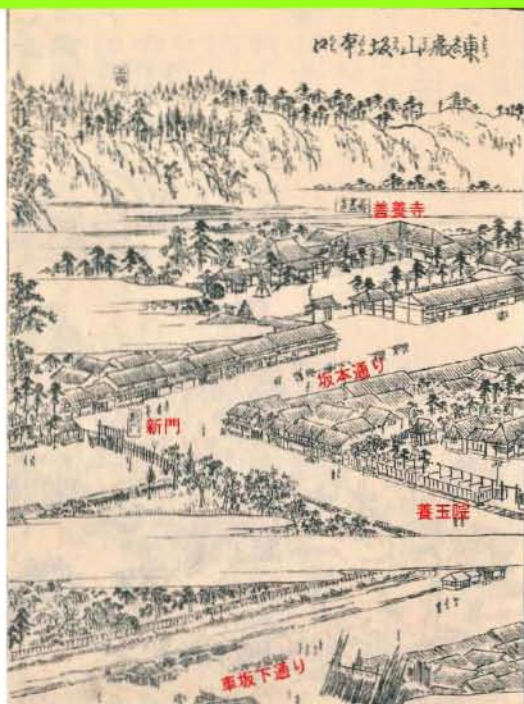


図14 東叡山坂本口  
(『江戸名所図会』部分・加筆)

して幽趣あるが故にや、都下の遊人多くはここに隠棲す。花になく鶯、水にすむ蛙も、ともにこの地に産するもの。其声ひとふしありて世に賞愛せられはべり」と記す。

・高岩寺：『寺社書上』で確認すると、図12の「高岩寺」は誤記であり、測量日記の「高寺」が正しい。明治時代には巢鴨に移転した。巢鴨のとげぬき地蔵として知られる。

・養王寺と養王院：『寺社書上』で確認すると、測量日記の表記は両方とも誤記であり、図15の「養玉院」が正しい。

拝領した。図13の「上野惣絵図」のように、境内には根本中堂などの諸伽藍、徳川家の霊廟、法親王である輪王寺宮の本坊や諸大名らの寄進による三十六坊の子院が威容を誇っていた。江戸府内図では測量対象外の寛永寺の広大な寺域には「東叡山」と記すのみである。

図15の坂本町から金杉上町、金杉下町、三輪(三之輪、箕輪)町へと下谷道



図15『江戸府内図(北)』に加筆

に沿って町場が続く。下谷道沿いに形成された町家が、金杉村や三輪村を東西に分断するかたちで町場となり町奉行支配に移行した。

閑静な侘び住まいの里として知られていた根岸はこの地域にあった。『御府内備考』には「金杉村内の小名なれど、下谷に続ける金杉町近き地にして、殊にその名世人の知る所なればこれを載せぬ」と特記している。図16には「呉竹の根岸の里は上野の山陰に

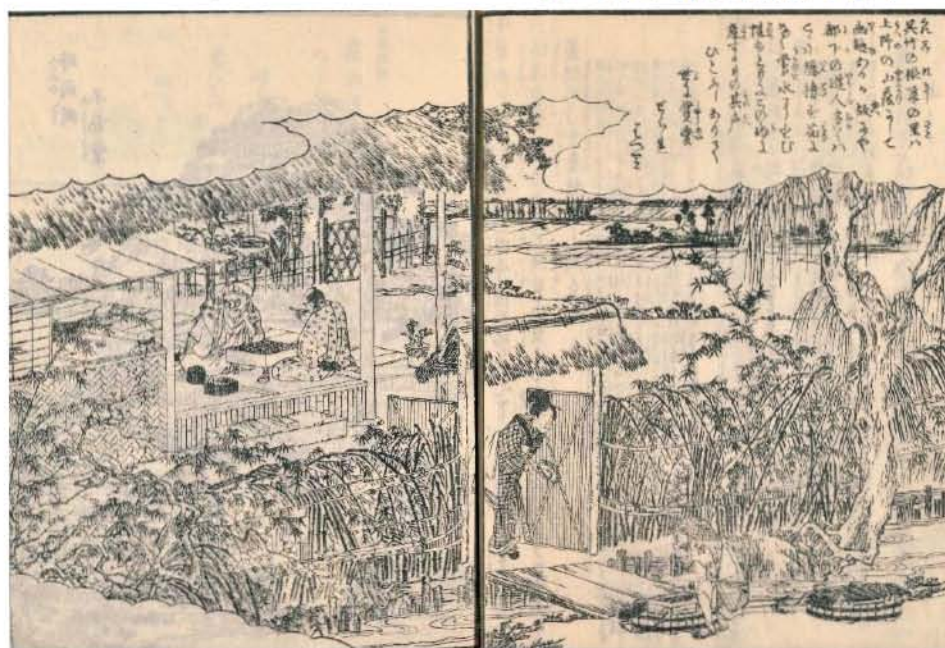


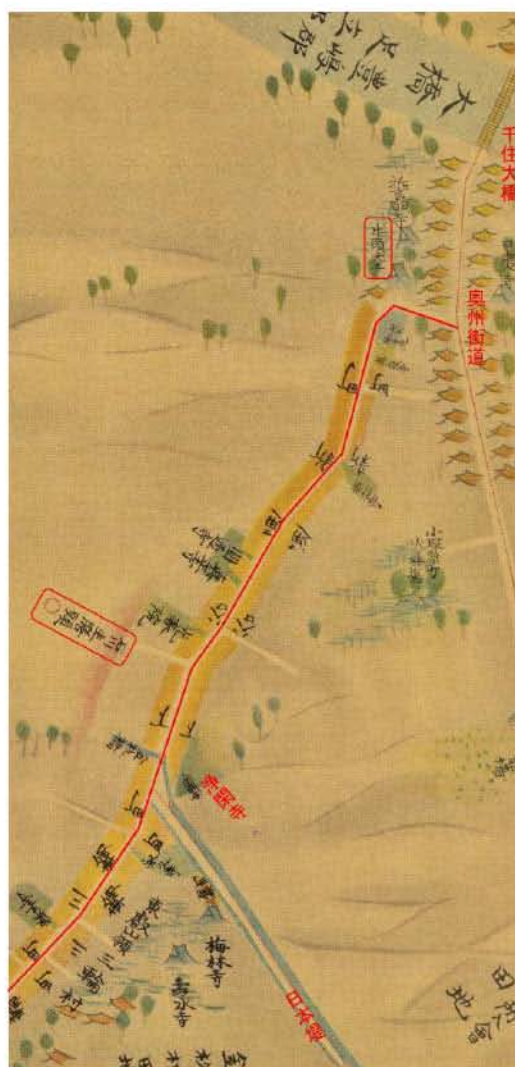
図16 根岸の里 (『江戸名所図会』)

・御切手町：御切手同心の拝領地が町屋敷となつたことから御切手町と称した。『国史大辞典』によると、切手とは大奥関係の通行証のことで、御切手同心は江戸城本丸の裏門(大奥に通じる切手門)を警護、そこを出入りする荷物や大奥女中の切手を検査した。

・小野照明神：図15の小野照明神が正しい。

・三輪嶋村：『御府内備考』には三輪町の隣町として「西の方三河島村」とあり、三河島村の誤記か。





八ツ時頃帰宿

今時須歸省

右西光寺 右横町野道  
右真養寺 右天王御手洗池

千住小塚原町

牛頭天皇石垣角に繋ぎ  
天印を残し畢る

④力印より  
○三間四尺

橋手前  
右脇棒杭有り

從是南東叡山御領  
田村權右衛門支配

川中界

下谷通新町

左一町ばかり引込石川千勝屋鋪 左光春院  
右横町野道 左眞正寺前 左円通寺

橘手前  
右照樟林有  
是是南東  
山御

右制札  
川中界  
下谷通新町

左橫町野道 九喜正寺前 大町通

左ばかり 藥王寺門前 左右共 又三輪町  
右横町 右永久寺 左横町  
右横道日本堤上り口土手筋也

金杉橋  
渡長 九間

土子村  
下 滝野川の  
也

左年  
 藥手問前  
 又三輪町  
 右橋町 右永冬寺 右橋町  
 右横道 日本堤 山口 右年跡  
 金杉橋 渡長  
 九間  
 子村 渡野  
 下



・浄閑寺：図18の浄閑寺も新吉原に關係深い。「生きては苦界、死しては浄閑寺」といわれたように、投込寺と呼ばれ新吉原の遊女や遊郭関係者を葬った。

測線は下谷道を北上し、三輪町から下谷通新町を経て牛頭天王社前で右折し、奥州街道（日光街道）に合流して、この日の測量を終えた。この日の八ツ時は午後二時頃であつた。

・日本堤：浅草聖天町の今戸橋から北西方向の三輪の浄閑寺にかけて山谷堀に沿った土手。日本堤から新吉原へと通じていた。



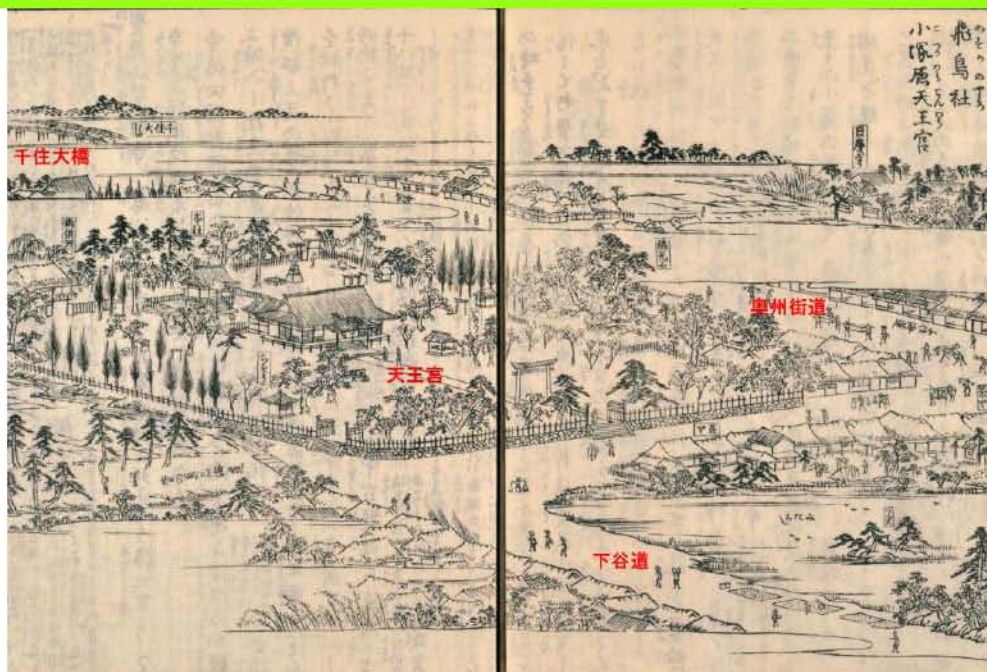


図19 飛鳥社・小塚原天王宮(『江戸名所図会』部分・加筆)

・田村権右衛門支配：田村権右衛門は東叡山目代として寛永寺の寺領管理などの事務一般を司った。代々田村権右衛門を襲名。

・石川千勝屋敷：伊勢亀山藩の石川主殿頭総佐の下屋敷。武鑑で石川千勝総佐と記載されたのは、文化六年十二月十六日に主殿頭に任官する以前である。

・牛頭天皇：牛頭天王のこと。牛頭天王は様々な神仏が習合した神で、祇園精舎の守護神、蘇



図20 千住宿小塚原町付近(『日光道中分間延絵図』部分・加筆)

民将來說話の武塔神、薬師如来の垂迹、スサノオの本地ともされた。疫病退散を願う祇園祭とともに全国に広がった。明治時代の神仏分離により、スサノオを祭神とする八坂神社、様々に表記されるスサノオ神社などに再編された。

#### 【図版の出典】

- ・『日記』の図版は香取市立伊能忠敬記念館に架蔵されている写真帳による。無断流用禁止。
- ・『江戸実測図(南)』は国土地理院ウェブサイトの古地図コレクションによる。
- ・『江戸府内図(北)』は『東京市史稿市街篇附図第三』による。
- ・図1、3、4、5、6、8、10、11、13、14、16、18、19は国会図書館デジタルコレク

ションによる。

図20は東京国立博物館所蔵である。

#### 【参考文献】

- ・『文恭院殿御実記 卷四十四』
- ・『御府内備考』
- ・『新編武蔵風土記稿』
- ・『町方書上』『寺社書上』
- ・『日光道中分間延絵図』
- ・『諸向地面取調帳』
- ・『寛政重修諸家譜』
- ・『武鑑』(文化十一年・十三年)
- ・『江戸名所図会』
- ・『武江年表』
- ・『江戸(東都)歳時記』

#### 【参考文献】

- ・『幻の料亭「百川」ものがたり―絢爛の江戸料理―』小泉武夫 新潮社
- ・『大江戸日本橋絵巻―『熙代勝覧』の世界』吉田伸之他 講談社
- ・『シーボルト江戸参府紀行』呉秀三訳 駿南社 異国叢書
- ・『江戸参府紀行』斉藤信訳 平凡社 東洋文庫
- ・『東京市史稿 市街編三十三』東京市役所
- ・『江戸名所図会を読む』川田壽 東京堂出版
- ・『江戸庶民の四季』西山松之助 岩波書店
- ・『江戸の町かど』伊藤好一 平凡社
- ・『下谷区史 本編』東京市下谷区役所
- ・『亀山市史』ウェブ版
- ・『続忠敬未公開書簡(一) 渋江新之助』伊藤栄子 会報三十九号



## 伊能図に描かれた現存十二天守(二)

会報九十四号から四回の予定で始めた連載の二回目である。前号で、伊能図に描かれた城は「まるでドローンを飛ばして得た空撮写真を見て描いたように俯瞰的である。伊能隊が城下の街路から見上げて描いた構図ではない。」と書いた。三年目に入ったコロナ禍の中、今回もちよつとした紀行文を楽しんでいたできれば幸いである。

### 犬山城(愛知県犬山市) 河崎 倫代

伊能忠敬一行が犬山城下に入ったのは、第七次測量(九州一次)の帰路、文化八年三月二十日(一八一一年五月十二日)だった。『測量日記』によると、中山道鵜沼宿(岐阜県各務原市)を出立した忠敬、下河辺、青木ら五名は、南鵜沼で木曾川(川幅百二十八間九寸。約二三〇尺)を渡って犬山城下に入り、上本町の島屋与八宅に止宿。夜は晴れて天文測量をおこなった。他方、支隊の坂部、永井、箱田ら五名は加納宿(岐阜市)を出立して、熱田・木曾追分より測量をスタート。里小牧渡場(愛知県一宮市木曾川町)で木曾川を渡った。川幅は二百十二間、「遠測術にて求む」とある。三月二十二日、両隊は名古屋城下で合流した。

犬山城は伊能図に「成瀬居城」、「測量日記」に「成瀬隼人正」とあるように、元和三年(一六一七)からは尾張藩付家老の成瀬正成が城主になった。それまで目まぐるしく城主が変わった犬山城は、以後江戸時代を通じて成瀬家九代の居城となる。しかし、明治四年(一八七二)廃藩置県の断行により、犬山城も天守を除いて櫓・城門などほ



上・伊能大図(第118・114)、右・赤枠部分拡大図  
『伊能図大全』(河出書房新社)2巻193p、3巻18pより転載



対岸の旅館(岐阜県各務原市)から見た犬山城(白帝城)



とんどが取り壊された。残った天守は、明治二十八年(一八九五)、愛知県から旧城主・成瀬正肥へ条件付き無償譲渡され、昭和十年(一九三五)国宝に指定された。以後、平成十六年(二〇〇四)まで成瀬家がこの巨大な「国宝」を所有していた。しかし、『測量日記』には、



犬山城と城下の記述は無い。「成瀬隼人正代官大野勘吾、小牧代官小山七郎兵衛手付吟味方志水幸左衛門、同心水谷仁平」が挨拶に来たとのみ記されている。伊能図には「美濃国各務郡・尾張国丹羽郡」の国境として木曾川が太く描かれ、「晴天測量」の結果の☆印が記されている。

私が犬山城下を訪れたのは、二〇一八年四月四日のこと。前夜の宿は対岸の木曾川辺に建つ岐阜県各務原市の旅館だった。部屋の窓からは木曾川の約八五〇の断崖に立つ犬山城が、咲き始めた桜花の向こうに見えた。まさに「後堅固（うしろけんご）の城」といわれる犬山城の雄姿だった。こんなに眺望のいい部屋に泊まったことは無く、いつまでも見とれていた。

翌朝、絶景に別れを告げて出立。犬山橋（約二二三メートル）を渡ると、左の橋詰に「内田の渡し」の常夜燈があり、そこから鶴飼の遊覧船が出ている。犬山城を見上げながら鶴飼を楽しめる趣向だ。忠敬隊も船で渡河し川幅を測ったのだろう。

川沿いに犬山城までは歩くにはかなりの距離と勾配のある道だった。天守の高さ一九メートル。階段は急勾配で、とみに足腰の弱っている身には危険極まりなし。ようよう天守最上階に至るも、望楼型の天守からの絶景を楽しむには、高所恐怖症を克服して回廊（廻り縁）に出なければならなかった。眼下にはゆったりと木曾川が流れ、直下には犬山城下の町並みが続く。遠くに白山、御嶽山、名古屋駅ビルなども見えるという。

城下町を歩く。震災に遭わなかった風情のある町並みの所々に「町名由来看板」が設置されている。伊能図の宿所島屋のあった「上本町」は、問屋場・高札場等があり城下の中心だったようだ。

しかし、短時間の滞在では、島屋の情報は得られなかった。

#### 参考文献

山下景子著『現存12天守』  
幻冬舎新書 二〇一一年  
『古地図で読み解く城下町の秘密』  
サンエィムック 二〇二一年



町名由来看板「本町」



急こう配の階段を恐るおそる降りる



犬山城天守閣



木曾川に架かる犬山橋  
対岸は岐阜県各務原市



犬山城下の町並み



対岸に「伊木山」が見える  
伊能図では城側に描かれている



## 弘前城（青森県弘前市）

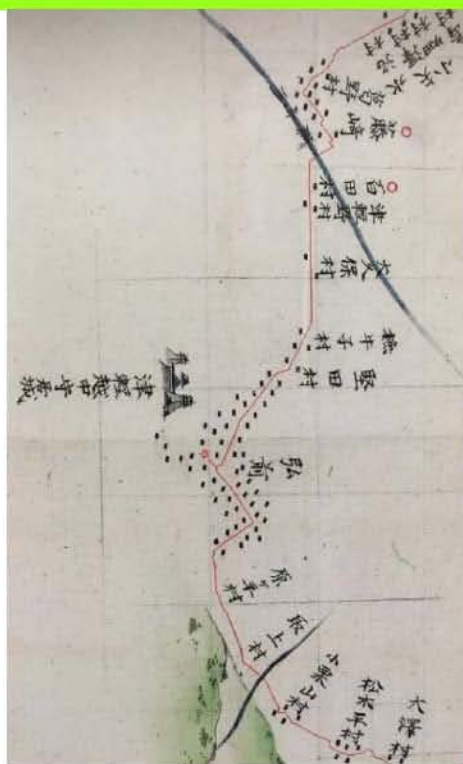
室山 孝

享和二年六月十一日（一八〇二年七月十日）、伊能忠敬は内弟子四人・下僕二人の総勢七人で江戸を出立し、奥州街道を北上した（第三次測量）。

八月二日、忠敬は滞在中の能代湊（秋田県能代市）から、津軽藩（四万五千石）の城下町弘前までの泊触を出した。弘前は八日止宿の予定であった。実は測量隊は能代に一日間滞在し、日食測量をしていた。天文測量を重視する忠敬にとって、日食測量は貴重な機会であり、まずその様子を、忠敬が携行し記録した「忠敬先生日記」と江戸で書き改めた「測量日記」、また忠敬の書状（高橋至時あて）から見ておこう。

七月二十三日四ツ後、能代に到着すると、直ちに子午線儀の組み立てと設置に取りかかり、翌日午後完成。その夜は晴天で天測が行われた。しかし二十五日、忠敬は持病（痰と咳）を発症して床につき、翌二十六日には幕府若年寄堀田摂津守正敦が夢に出てきたという。

日食当日の八月朔日（太陽暦八月二十八日）、朝



伊能大図（第 43）  
『伊能図大全』1 巻 146p（河出書房新社）

から曇り空で、午後は薄黒い雲で覆われて日影は全く見えず、「初虧食甚」（「忠敬先生日記」は「初天食甚」とする）頃は雲がいつそう深くなり、「復円前」に漸く「濛影」（ぼんやりした影）が見えたので、これを大望遠鏡と「中望遠鏡」（書状は「小望遠鏡」とする）で測量したが、「復円頃」また雲に覆われて見えなくなったとある。日食の欠け始めと最大食、終了時刻の測量は叶わず、きちんとしたデータは得られなかった。三日、江戸の高橋至時へ書状を送り、四日、能代を出立した。

日食・月食等の測量は経度測定のため重要な作業であり、江戸・大坂と同時観測で得られたデータ（南中時刻と食の開始時刻）を対比（時間差から経度差を算出）して求められるものであった。時刻算定には、測量隊が携行した垂揺球儀という振り子時計を使った。太陽の南中時刻を起点として翌日の南中までの時間（一太陽日）を垂揺球儀の目盛りで測り、同じように日食の開始と終了の時刻を測った。なお、日食前日、大風雨のため垂揺球儀が止まるというハプニングもあった。

さて、測量隊はその後内陸を東へ進み、大館（秋

弘前に到着したとき、町役人の出迎えはなく、町の入口に宿の下男が一人出て案内するのみであり、これでは町家の客引きと同じである。宿に着くとようやく亭主が袴姿で出迎えた。この三国屋は商人荷物問屋とのことで、諸国の商人が大勢相宿で、食事も粗末であった。測量隊の隊員には汚れた夜具が一人一つあて出されたが、弟子の中には風邪をひいている者もいたので、布団を二つ三つやと借りることができた。

宿の亭主は津軽藩の御用諸賄いを請負う町人のようであったが、到着時町役人も来なかった。このままでは領内測量も差し支えるので町役人を呼ぶと、宿老が一人やって来た。このとき領主（九代津軽土佐守寧親）は青森町へ遊興のため出かけており、青森止宿は差し支えるのではないかと云う。荷物の運搬、先々の海辺の道や宿所のことを尋ねても、この宿老は不案内でさっぱりわからない。そこで郡方か町名主とよく相談し、測量御用が差し支えないよう取り計らうように申し付けると、宿老は町名主や関係役人に相談し、村順と道程が少しわかってきた。

公儀（道中奉行と勘定奉行）の御触が出され、御勘定所のお声掛けもありあつて、海辺測量御用のことはわかっている筈なのに、津軽藩の地元はそのことを知らず、蝦夷地往来御用と同様と心得ているようで、等閑（なござり）である。

と、忠敬は不満を記している。九日には津軽藩士竹内甚左衛門（第一次測量のとき忠敬に書状を寄こした人物）が領主からの菓子箱を持参し挨拶に来たが、忠敬の憤りは収まらなかったのである。

さて弘前城は、現在、東北屈指の桜の名所とし





内堀と天守 (2005年8月、筆者撮影)

光景はしばらく見られなくなりましたが、期間限定で秀麗な岩木山をバックに写真を撮ることが出来る。

さて、享和二年八月十日、測量隊は弘前城下から北上し、新城村(青森市)に宿泊。翌十一日、青森町入口まで測量し、途中の油川村(青森市)に戻って宿泊。その日の午後、宿所に旧知の津軽藩士松野茂右衛門が来訪したので、忠敬は共に馬に乗って青森町へ出向き、同じく旧知の山鹿八郎左衛門を訪ねている。

「測量日記」によると、松野も山鹿も青森での宿泊を勧めたが、すでに測量機器も設置したので油川止宿に決め、松野と共に青森へ山鹿を訪ねた。そこで、領主から下された菓子子の御礼をいい、弘前城下の町役人たちの不行き届きを申し立てている。また山鹿と松野に、三厩・小泊越えの難所での長持ち運搬の不安を述べ、長持ち一棹は油川より十三町へ村継で送りたいと相談し、その通りになった。八月十八日、三厩(青森県外ヶ浜町)で忠敬は、山鹿が忠敬の訴えを受けて各方面に発した御触を見ており、「天文家伊能勘解由殿」に「鹿末之取扱無之様」と命じていたことがわかった。

測量事業自体が軽んじられてはならないと思いついて、旧知の津軽藩士山鹿・松野という強い味方を得て、その後の行程に展望を切り開く契機としたのではないだろうか。

現在の天守と背景の岩木山  
(提供：弘前公園総合情報サイト)

松野茂右衛門と山鹿八郎左衛門は、忠敬の「江戸日記」にしばしば登場する。松野は、忠敬の友人で和算家の会田算左衛門の門人。江戸の忠敬を度々訪ね、忠敬の天文暦学の門人ともいい、第五次測量出発の文化二年(一八〇五)二月二十五日、会田とともに品川宿まで見送りに来ている。山鹿は山鹿素行を祖とする兵法家の家柄で、津軽藩の重職にあった人物であり、忠敬も本所の津軽藩邸に挨拶等で二人を何度も訪ねており、交流は頻繁であったという。

なお、測量隊の宿所となった三国屋は土手町にあったが、詳細は不明である。現在、土手町通り(県道二六〇号線)は弘前の夏の名物「弘前ねぶたまつり」が練り歩く重要なコースとなっている。

※本稿全体について玉造功氏のご助言、また津軽藩の松野茂右衛門・山鹿八郎左衛門について、前田幸子氏のご教示に感謝します。

#### 【参考文献】

- 『千葉県史料近世篇 伊能忠敬測量日記一』千葉県、一九八八年
- 渡辺一郎『伊能測量隊まかり通る』NTT出版、一九九七年
- 渡辺一郎『図説伊能忠敬の地図をよむ』河出書房新社、二〇〇〇年
- 『青森県の歴史散歩』山川出版社、二〇〇七年
- 『伊能忠敬 日本列島を測る―忠敬没後二〇〇年―(前編)』伊能忠敬研究会、二〇一八年
- 井上辰男・前田幸子『伊能忠敬の未公表書簡(一)』『伊能忠敬研究』九十号、二〇二〇年



## 彦根城（滋賀県彦根市）

相良 文昭

伊能忠敬一行は第五次測量の往路と復路に彦根城下に宿泊している。

文化二年九月二日（一八〇五年十月二十三日）、前日に泊まった甘呂村（彦根市）から中敷村まで測量し、肴問屋広田七右衛門にて休憩した後、彦根城下の伝馬町（現彦根市中央町）に到着した。「肴問屋広田七右衛門」でネット検索をした結果、江戸時代に魚屋が立ち並んでいた下魚屋町（現彦根市城町一丁目）に、魚問屋を営んでいた旧広田家住宅（屋号「納屋七」）が彦根市の「景観重要建造



伊能大図（第125号）

『伊能図大全』3巻48ページ（河出書房新社）より

物」として保存されていることがわかった。主屋の規模は桁行・梁間とも一五・五mの切妻造り。内部は二列六室となっている。おそらく、このどこかの部屋で測量隊は休憩したのだろう。

この日は伝馬町の伝左衛門宅に宿泊している。その際、彦根藩主より伊能忠敬と高橋善助（至時の次男後の渋川景祐）に金三百疋宛、坂部貞兵衛に金二百疋が贈られている。彦根藩は幕末の老井伊直弼を輩出した譜代大名筆頭の家柄で、この時の藩主は直弼の実父である一三代直中だった。夜は晴れていたため、妙法山蓮華寺（現彦根市中央町）の本堂前庭で天体観測を行っている。

ところで、伊能図では彦

根城の北東部にかなり広い水面（湖）が描かれているが、現在の地図には見当たらない。『測量日記』を開いてみたが、そこにも名称は無く、測量隊は琵琶湖畔の松原村、磯村、筑摩村と測量し、米原宿に止宿している。後に入江内湖・松原内湖と呼ばれるこの二つの水面は、干拓が進められて今は陸地と化している。米原観光ポータルサイト「まいばらんど」によると、入江内湖は広さが三〇〇haもあり、昭和初期までは船を使って湖内を往来していたという。明治六年に土を盛る干拓計画が

あったが実現はされなかった。昭和一九年に食糧増産の為、国営事業として干拓事業が始まった。元々水深が浅く湖底もほぼ平らで水田化に適していたので、土は盛らず水を抜き取る方法が行われた。着工から五年、昭和二四年に干拓事業は完成した。測量隊はこの入江内湖の周囲を丹念に測って測線を残している。

第五次測量の復路、文化三年十月十六日（一八〇六年十一月二十五日）、朝七時前に長浜町を出発し、十五時ごろに彦根城下に到着した。ここでは吉右衛門宅（本陣）・嘉兵衛宅（脇本陣）で宿泊している。この夜は、曇りのため天体観測を行えなかった。彦根藩主より「鯉魚七尾」贈られている。

彦根城には、二〇一七年十月十八日、京都への車旅行の途中で寄り道した。

表門橋を渡り、なだらかな階段を上がり、天秤櫓前の廊下橋の間をくぐり、天秤櫓から太鼓門を経て彦根城天守にたどり着いた。

天守内部は、階段が四五度前後で歩幅が狭く、上ることになり注意を要した（同じく、現存天守の丸岡城内部の階段でも同様の感想を持った）。この時は予定外の訪問だったので、十分な時間を取る事ができず、彦根城のみの見学だった。次回は、時間を作って訪れ、城下町の雰囲気も味わいたいと思っている。

### 参考文献

彦根市ホームページ「彦根城城下町町名の変遷」  
「旧広田家（納屋七）住宅」  
彦根市観光ガイドホームページ「景観重要建造物 旧広田家住宅」





彦根城の石段



旧広田家住宅（彦根観光協会ホームページより）



天秤櫓



廊下橋



大詰門塙



天守



玄宮園から見た天守と石垣



# 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十九回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第八次測量】（九州第二次） 長崎く博多く小倉 自 文化10年8月19日 至 文化10年10月13日

【本隊】

文化10年8月 (1813)

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
--------	------	-----	--------	-----	---------	------

1912	(13)	同	同	同	長崎町逗留測。長崎村、御奉行支配新大工町境、木戸真中より総一手、市中測、左寺町通追分、左横町伊勢町、二股川石橋渡、左南馬町・右北馬町三辻を歴て諏訪大明神へ打上。大華表の元、馬場（諏方宮、天満宮）追分より天満宮へ打上、右大悲庵、同猪ノ神、石華表、桜門前打止、松ノ森天満宮と云。又馬場追分より諏方宮へ打上、四辻、右大村木場道・左炉粕町通を歴て二ノ華表、隨身門前打止、長崎町総鎮守諏訪大明神。又馬町三辻より、四辻（右北馬町横町、左横町大井手町）、勝山町、木戸あり、左横町今博田町、四辻、右立山御役所通追分。右横町八百屋町、左横町勝山横町、右御代官屋敷、左横町桶屋通の追分。木戸、左横町紺屋町、木戸、桜町、右横町内中町、左横町引敷町、横町、左右桜町横町、右町年寄高島屋敷、木戸、豊後町、四辻。木戸、本興善町、左右興善町横町、左行当、毛利屋敷、木戸、四辻、堀町、横町、本博田町、四辻、左右横町博田町、本通。	202
191	(9, 13)	長崎町炉糟町	長崎県 長崎市	禅宗大同庵	長崎町逗留測。長崎村、御奉行支配新大工町境、木戸真中より総一手、市中測、左寺町通追分、左横町伊勢町、二股川石橋渡、左南馬町・右北馬町三辻を歴て諏訪大明神へ打上。大華表の元、馬場（諏方宮、天満宮）追分より天満宮へ打上、右大悲庵、同猪ノ神、石華表、桜門前打止、松ノ森天満宮と云。又馬場追分より諏方宮へ打上、四辻、右大村木場道・左炉粕町通を歴て二ノ華表、隨身門前打止、長崎町総鎮守諏訪大明神。又馬町三辻より、四辻（右北馬町横町、左横町大井手町）、勝山町、木戸あり、左横町今博田町、四辻、右立山御役所通追分。右横町八百屋町、左横町勝山横町、右御代官屋敷、左横町桶屋通の追分。木戸、左横町紺屋町、木戸、桜町、右横町内中町、左横町引敷町、横町、左右桜町横町、右町年寄高島屋敷、木戸、豊後町、四辻。木戸、本興善町、左右興善町横町、左行当、毛利屋敷、木戸、四辻、堀町、横町、本博田町、四辻、左右横町博田町、本通。	202
1912	(13)	同	同	同	大村町、左町年寄寺島屋敷、四辻、外浦町、左大村横町、右外浦横町。左西御番所前。右横町平戸町。枕島町、海辺大波戸に出、乗船場沿海残制札右の石垣角に繋。又右横町平戸町より枕島町、木戸、四辻（右平戸町横町、左海辺中ノ波戸通）。本五島町、四ツ辻（右五島町横町、真直は本五島町）、左へ曲る。左諫早屋敷、浦五島町より海辺へ出、番所波戸と云。又浦五島町より左深堀屋敷、右筑前黒田美作屋敷、左筑前屋敷、右浦五島町横町、左中ノ波戸横町、左柳川屋敷、木戸、三辻（右横町舟津町）追分。左浦五島町、右横町舟津町裏通、新橋に繋。左大黒町、右恵美須町、三辻（右恵美須町横町）、左島原屋敷、又大黒町、左平戸屋敷、三辻。此より海辺へ打出、右佐嘉屋敷、左平戸屋敷海辺、平戸屋敷石垣角に繋。	202



20		194	193	宿泊日・旧暦
(14)	小休	(13)	(13)	(西暦)
長崎町炉糟町	長崎村	同	長崎町炉糟町	宿泊地
同 長崎市	同 長崎市	同	同 長崎市	現・市町村名
禅宗大同庵	臨濟宗河東山禅林寺	同	禅宗大同庵	宿泊宅
長崎逗留測。新大工町より木戸、上伊勢町、左浄土宗天靈山竜測寺、右伊勢町横町、阿弥陀橋、木戸、八幡町、右阿弥陀堂。左華表前、左禅宗徳恩寺、三辻、右横町八幡町、木戸、三辻。雨見合、不止に付止宿へ引取。恒星測定		又勝山道追分より炉粕町、左天台宗松岳山安善寺、右横町馬町横町、左禅宗高林寺、右彦山修験本覚寺、止宿(即炉粕町)、禅宗大同庵測所、左荒神社、同諏方社、裏門木戸、諏方境内、二ノ華表、諏訪大明神前四辻に繋終。此日大村老侯より御使者土屋刺史之祐を以、先日暦理実測御尋向の即答申上候御挨拶に御国産を被下。		特記・天体観測
二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	大図番号



21-2	21-1	宿泊日・旧暦
昼休	(15)	(西暦)
長崎村	長崎町炉糟町	宿泊地
同	同	現・市町村名
長崎市	長崎市	
臨濟宗河東山禪林寺	禪宗大同庵	宿泊宅
<p>又、二股川尻海辺江戸町より川添を測。右横町築地行、西浜ノ町、右久留米屋敷、左長久橋前、印を残。右西浜ノ町横町、印を残。右町年寄久松屋敷、四辻(右西浜町本通、左大橋手前)印を残。四辻、右万町本通、左右橋手前、万屋町、榎津町、四辻(右榎津町本通、左右橋手前)印を残。四辻、右本古川町、左右橋手前、木戸、西古川町、右横町東古川町、四辻、右銀屋町、左右橋向は袋町、四辻、右磨屋町、左目鏡橋手前印を残。木戸、諏方町四辻、右諏方町本通、左橋向は今魚町、新橋町、四辻、右に木戸、新橋町本通、左橋向は本大工町、木戸、中紺屋町、四辻、右横町(右中紺屋町、左今紺屋町)、左橋向(右今紺屋町、左中紺屋町)、本紙屋町、四辻(右紙屋町横町、左橋向桶屋町)印を残。四辻(右紙屋町横町、左橋向古町)、四辻、右本紙屋町横町、左橋向は今博多町、四辻(右横町名なし、左橋向は大井手町)、左二股川落合、八幡町、右八幡町本通り、四辻、左橋向、伊勢宮門前、右修験大覚院、阿弥陀橋の元に繋。</p>		特記・天体観測
<p>長崎逗留測。市中八幡町三辻より左臨濟宗河東山禪林寺、右横町八幡町、左浄土宗深崇寺、木戸、右側計麴屋町、木戸、左浄土宗万年山三宝寺、左浄土宗東雲山淨安寺、左無本寺東明山興福寺、右興福寺庵あり、木戸、御代官屋敷前へ出る追分印を残。今紺屋町、右横町、右今紺屋町、左中紺屋町、中紺屋町、木戸、新橋町、右横町新橋町通、左真言宗延命寺、木戸、諏方町、右横町諏方町本通、左法華宗長照寺、木戸、磨屋町、三辻印を残。木戸、銀屋町、左臨濟宗海雲山皓臺寺、右横銀屋町本通、木戸。此より左右市中、左出来鍛冶屋町、右今鍛冶屋町横町、四辻、右今鍛冶屋町横町、左出来鍛冶屋町、印を残。三辻印を残。左今石灰町、右新石灰町、右横町万屋町、四辻印を残。思案橋手前、左右川添片側町、思案橋、左右本石灰町、左本石灰町横町、印を残。右横町浜崎と云。舟大工町、木戸、左丸山町、二重門それより遊女町なり。左横町舟大工町、三辻印を残打止。</p>		大図番号



2 1 4	2 1 3	宿泊日・旧暦
( 1 5 )	( 1 5 )	(西暦)
同	長崎町炉糟町	宿泊地
同	同 長崎市	現・市町村名
同	禪宗大同庵	宿泊宅
又飛て、右今紺屋町、左出来紺屋町、三辻より石橋、木戸、榎津町、四辻(右横町本古川町、左横町万屋町)、四辻、左右横町(同上)、四辻(左右横町同前)、木戸、四辻に繋。石橋、材木町、四辻、右横町材木町裏川岸通、木戸、左横町(左東築町、右西築町)、四辻、右横町本紺屋町、左横町西築町、木戸、今下町、石橋、四辻、左右横町今下町本通、右天満宮社、三辻、左島原町、本博多町、左町年寄後藤屋敷、三辻(真直は新橋通)、四辻に繋。左横町平戸町、四辻(右横町堀町、左本五島横町)、今町、四辻、右横町金屋町、左横町本五島町横町、右横町名なし、四辻(右横町今町、左横町船津町)、左横町本五島町本通、(左五島町、右舟津町)に繋。恒星測定		特記・天体観測
二〇二	二〇二	大図番号



2212	2211	宿泊日・旧暦
(16)	(16)	(西暦)
同	長崎町炉糟町	宿泊地
同	同 長崎市	現・市町村名
同	禪宗大同庵	宿泊宅
又飛て、右新石灰町、左今石灰町四辻より御料所長崎村内高野比良郷を測、左天台宗顕應寺、左真言宗清水寺、右修験聖寿院、左真言宗長崎山清水寺、高野比良郷在所散家、左真言宗聖壽山文珠院、愛宕登口、華表迄測。愛宕山願成寺。又飛て市中油屋町三辻より思案川石橋、三辻印を残、茂木村へ横切の初。右本石灰町、左高野平小島郷、市中限印を残。又思案川石橋三辻より右思案川に添、左片側町本石灰町の内横町、左修験金剛院、四辻、思案橋端に繫。又船大工町三辻より船大工町本通を測、船大工町、本籠町、左真言宗青竜山大徳寺、唐館外構を測、木戸、長崎村十善寺郷、石橋、十善寺郷人家、右唐人遠見番長屋、大村領戸町枝大浦、御料所・大村領界印を残。	長崎逗留市中測。杵島町海辺、中ノ波戸より東西浜町通測、左右杵島町、四辻繫。左右杵島町本通、木戸、平戸町、左右平戸町本通、四辻(左大村町、右外浦町)本通に繫。島原町四辻(右外浦町、左島原町)に印を残。左右本下町、本下町横町。石橋、町界、西築町、左右西築町横町、四辻、右側西築町、左側東築町、大橋、西浜町、右制札、四辻に繫。四辻、左右西浜町、東浜町、左横町万屋町へ出る通、右横町、石橋、右横町東浜町、鍛冶屋町、左右横町東浜町、石橋、木戸、四辻、左横町今鍛冶屋町、右横町出来鍛冶屋町、四辻に繫。思案橋通、油屋町、左横町油屋町、三辻印を残。油屋町本通、聖寿院門前、新石灰町、四辻、木戸、印を残。(右側今石灰町、左側新石灰町)、四辻、木戸、直通同前、左横町木戸より先は油屋町、左右今石灰町、木戸、今籠町、右臨濟宗聖壽山崇福寺、右一向宗大光寺門前、左山伏泉良院、一向宗南光寺、右浄土宗正覚山大音寺(長崎奉行松平図書頭墓)、木戸、出来鍛冶屋町、四辻に繫。	大図番号
二〇二	二〇二	特記・天体観測







26		25			宿泊日・旧暦
(20)	昼休	(19)	昼休	小休	(西暦)
長崎町炉糟町	長崎町大波戸	長崎町炉糟町	浦上洲村竹窪郷	浦上洲村稻佐郷鯨堂	宿泊地
同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	現・市町村名
禅宗大同庵	碇屋長左衛門	禅宗大同庵	弁天社	庄屋志賀和一郎	宿泊宅
<p>長崎逗留測。大黒町の裏、昨日打止より沿海順測、大黒町裏(唐船掛場)、左肥後屋敷、佐賀屋敷、大黒町上り場、平戸屋敷石垣角に繋。平戸屋敷横大黒町新橋右柱に繋。左柳川屋敷、筑前屋敷、浦五島町裏、左深堀屋敷、浦五島町より引出に繋。左諫早屋敷、樺島町、中ノ波戸に繋、大波戸、横制札右柱に繋。諏方大明神御旅所、江戸町出島阿蘭陀屋敷入口、石橋手前に繋。此より出島阿蘭陀屋敷を左にして回る。阿蘭陀屋敷水門前、石橋右柱に繋(出島一周測)、西築町、対州屋敷、二股川尻、横物川添打上、左俵物役所、東築町、長久橋手前向右柱に繋。又二股川尻より沿海、二股川尻中央界、江戸町、川を引渡直に海辺江戸町裏に繋。</p>		<p>長崎逗留測。乗船、御料所浦上洲村水ノ浦郷より沿海順測、平戸小屋郷、江ノ浦、江ノ浦川、稻佐郷、左山上、浄土宗筑後国善導寺末終南山悟真寺、船津浦、稻佐崎、左山上に御代官持臺場、稻佐郷、鯨堂、割石、長崎大黒町口の渡場、稗田、坊ヶ崎、横瀬、菜切川、菜切堂、竹窪郷、左弁天社、別当古義真言宗宝珠山万福寺、梅ヶ谷、鎌、大川尻(舟渡)、浦上山里村、里郷、新土井を歴て左大川添打上、山里川落合迄測る。又新土井より沿海測、左の新田堤を通る、曲尺ノ手、馬竈下、馬込郷、左山上筑後善導寺末浄土宗天王山聖徳寺、時津街道へ出。御船蔵、御船番所、塩硝蔵、御米蔵、北瀬崎、長崎村、船津浦、御奉行支配市中大黒町裏にて沿海打止。</p>			特記・天体観測
		二〇二			大図番号
		二〇二			二〇二
		二〇二			二〇二



29	28	27	宿泊日・旧暦
(23)	(22)	(21)	(西暦)
同	同	長崎町炉糟町	宿泊地
同	同	同 長崎市	現・市町村名
同	同	禪宗大同庵	宿泊宅
<p>同所逗留。地図並諸帳を調。恒星測定</p> <p>長崎逗留測。江戸町裏昨日打止より沿海順測、左俵物御蔵、昆布蔵、新地渡口石橋右柱に繫。此より新地へ渡を取、新地唐人荷物蔵門前に印を残。又新地渡口石橋より沿海順測、銅庄跡、溝川尻、本籠町新地石橋手前に印を残。此より新地へ石橋を渡、門前を歴て新地唐物蔵を右にして回る。右唐物蔵番所前門前に繫、又門前に繫(新地唐物蔵一周測)。又石橋手前より石橋上の印に繫、御料所長崎村十善寺郷、昆布蔵、戸町村枝大浦、大浦番所、大浦を歴て此より十善寺郷入口印迄繫、又大浦より沿海、大浦川尻、弁天崎(左山上に弁天社)、小菅浦、汐ハヤリ崎、左引込遠見番所、戸町御番所(黒田鍋島交代)、戸町村人家下(戸町浦)、左大村領番所、小川尻、戸町崎、岩井浦、女神崎、女神御臺場、右女神島遠測、女神崎測遠に繫沿海打止。それより乗船、帰宿。恒星測定</p>			
二〇二	二〇二	二〇二	大図番号



3		2	1	文化10年9月	宿泊日・旧暦
(26)	伊能他四名 昼休	(25)	(9.24)	(1813)	(西暦)
深堀村	土井ノ首村	同	長崎町炉糟町		宿泊地
同 長崎市	同 長崎市	同	長崎県長崎市		現・市町村名
本陣武右衛門 権八 熊治郎	百姓清蔵	同	禅宗大同庵		宿泊宅
<p>【伊能他四名】小嘉倉村字前原浜より左山沿海、枝中久保、字塩屋分、小嘉倉本村人家下を歴て山ノ神島へ渡り一周測。又本村人家下より、枝柳ノ浦人家下や印を歴て向海へ横切印を、又ヤ印より千本松鼻を回、横切残印に繋、土井ノ首村、鹿ノ尾川尻力印を歴て川尻片測。又力印より土井ノ首本村、字網代人家下浜ア印を歴て海へ横切、黒口浦へ出、又ア印より立石鼻、押通シ鼻、クビレ谷印を歴て向海へ横切押印を残、谷印より押通シ鼻、鬼塚鼻、横切残押印に繋、字崎網代浦に打止終。五郎江島遠測。恒星測定</p>		同所逗留。地図仕立。恒星測定		同所逗留。阿蘭陀出島館並に象を見、唐館を見る。	
二〇二	二〇二	二〇二	二〇二		特記・天体観測
					大図番号



5		4	宿泊日・旧暦
( 伊能他四名 昼休共 28)	永井他三名 昼休	( 27)	(西暦)
深堀村	香焼島本村(島村)	深堀村	宿泊地
同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	現・市町村名
本陣武右衛門 権八 熊治郎	百姓幸治兵衛	本陣武右衛門 権八熊治郎	宿泊宅
<p>【伊能他四名】土井首村字崎網代より左山沿海、サ印を歴て佐世婦島へ渡、一周測。サ印より坊ヶ崎、黒口ノ浦、横切残に繋、竿ノ浦村、字江川、字居石、深堀村、字戸泊(船蔵あり)、字亀ヶ崎人家前メ印を歴て向海横切、カ印を残、止宿にて昼休、メ印より堂ヶ崎を回、横切残カ印に繋、深堀本村字船津測所に至り、深屈屋敷、枝有海、呼崎にて沿海終。外に深堀村持眉マユ島、野牛島、上女島(本名辯才島)一周測。恒星測定</p>		<p>特記・天体観測</p> <p>深堀村逗留測。手分。【永井他三名】香焼島属高島を測、北鼻より右山測、小浜、石炭堀小家五軒、中山浦を歴て絶頂遠見番所へ打上、又中山浦より沿海測、金堀崎、広磯浦、左沖に羽島、中島遠測、御料所論島に付遠測、字広磯崎にて両手合測。高鷹島属上二子島一周測。上二子島より下二子島遠測、御料所論島故遠測。大筆村持横島測遠職より西鼻瀬続片打、東鼻瀬続片打測る。【門谷他三名】領蚊焼村属高島を測。北鼻より手分、左山測、高島、宮崎鼻を回て、広磯崎にて両手合測、鷹島一周終。蚊焼村持飛島、野島、黒島、木ヶ島一周測。恒星測定</p>	
二〇二	二〇二	二〇二	大図番号



宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
8	(10.1)	高浜村	同 長崎市	古庄屋	深堀村逗留測。手分。【永井他三名】香焼島属沖ノ島を測。字アゼ浜より右山測、アゼ崎、左沖に口ノ瀬遠測、押通鼻、大渡浦にて両手合測。それより香焼島属伊王島人家前、別手沖島より引渡王印より右山測、右山上に真言宗長福寺に俊寛僧都の墓と云あり、又沖ノ島より引渡イ印に繋、右に稲荷社、西ノ浦、千畳敷、薦ノ巢崎、伊王崎、(大絶壁)、中ノ田浦、左瀬続小島遠測、網ノ浦、大明寺崎、島村枝大明寺分、横山下、伊王島人家前王印に繋一周終。	二〇二
7	(30)	同	同	同	【門谷他三名】香焼島属沖ノ島を測。字アゼ浜より左山測、沖ノ島、鶴ノ羽崎、伊王島瀬戸を歴て伊王島へ渡を取て王印を残、又地方伊王島瀬戸より、唐船浦入江口を歴て又伊王島へ渡を取イ印を残、又地方唐船浦入江口、大渡浦にて両手合測。又香焼島を測。枝栗ノ浦入口より右山測、栗ノ浦人家前切印を歴て裏海へ横切横印を残、又切印より竜ノ口鼻を回、横切残横印に繋、ケンキウ鼻十印を歴てケンキウ鼻を回て十印に繋。外に轢繋、恵美須崎、丸島遠測、丸島浦、深浦より横切残丸印に繋、カントイ浦、長浜より横切残丸印に繋、カントイ鼻石印を歴てカントイ鼻片測、カントイ島一周測。地方石印より字小瀬戸、蔭ノ尾島より引渡香印に繋終。	二〇二
6	(29)	深堀村	同 長崎市	本陣武右衛門 権八 熊治郎	深堀村逗留測。手分。【永井他三名】香焼島属沖ノ島を測。字アゼ浜より右山測、アゼ崎、左沖に口ノ瀬遠測、押通鼻、大渡浦にて両手合測。それより香焼島属伊王島人家前、別手沖島より引渡王印より右山測、右山上に真言宗長福寺に俊寛僧都の墓と云あり、又沖ノ島より引渡イ印に繋、右に稲荷社、西ノ浦、千畳敷、薦ノ巢崎、伊王崎、(大絶壁)、中ノ田浦、左瀬続小島遠測、網ノ浦、大明寺崎、島村枝大明寺分、横山下、伊王島人家前王印に繋一周終。	二〇二



10		9		宿泊日・旧暦
永井他三名	( 昼休共 3)	( 永井他三名 昼休共 2)	(西暦)	
枕島	脇御崎村	野母村	宿泊地	
同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	現・市町村名	
庄屋深堀代右衛門	本陣広次 太郎兵衛 良八	本陣元庄屋岩永行助 (別当年寄村役) 一向宗海蔵寺	宿泊宅	
【永井他三名】野母村入江口、字山下より沿海順測、野母崎を回(但海岸絶壁風波強、舟測ならず山の上を測)、ト印を歴て野母崎遠見番所へ打上、遠見番所にて山島を測。又ト印より、昨日沿海逆測打止サ印に繋終。それより乗船。		野母村出立。手分。【伊能他三名】野母村里、後浜(前浜より横切残)より左山沿海、脇御崎村(俗曰脇津)、音瀬鼻、二本松鼻、脇津人家前、字後浜を歴て裏海、字前浜へ横切を残、又字後浜より人家下津印を歴て、又裏海へ横切家印を残、津印より、呼崎、祇園山を回、横切残家に繋。それより十印を歴て弁天島を回て十印に繋。中ノ島遠測。それより字前浜、横切残に繋、測量所止宿下迄測る。松ヶ崎、ゲンダイ鼻、字伊賀見、トイカケ浜に沿海打止。恒星測定。		特記・天体観測
二〇二	二〇二	二〇二	大図番号	



1 4		1 3		1 2	1 1	宿泊日・旧暦	
伊能他六名	( 昼休共 7)	( 6)	昼休	( 5) 昼休共	( 4)	(西暦)	
日見村	茂木村枝飯香浦名	茂木村	茂木村枝大崎名字落迫	茂木村枝千々名	為石村	宿泊地	
同 長崎市	同 長崎市	長崎県長崎市	同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	現・市町村名	
本陣馬駅、伝兵衛 御用取次松尾五郎七 文蔵	百姓五郎太 百姓宇右衛門 百姓宇平治	庄屋森岡貞八郎	百姓清太郎	本陣乙名利七 百姓孫右衛門 百姓儀右衛門 百姓太八 百姓万之助	本陣利右衛門 定治郎	宿泊宅	
伊能他六名、止宿無之、日見村止宿。	茂木村入江出口キ印より沿海、字恵美須崎、左に恵美須社、字北ノ浦、字庄頭浜、字崩石(測遠松に繋)、字舅鼻、右大立岩、字簪泊、八洲川尻、飯香浦名、測所打上、琵琶ヶ崎、右旅籠瀬遠測、白崎字大多尾浦に打止。それより乗船。恒星測定	茂木村枝千々名字平瀬崎より沿海測、字菜切崎、枝大崎名、字落迫、枝宮摺名、峠川尻、字針ノ耳、字汐生崎、茂木村(月の名所)、左浄土宗松尾山玉臺寺、茂木村入江口モ印を歴て入江口を引渡、沿海打止キ印を残(即入江口渡巾。又モ印より袋形の入江を回、土橋手前土印を歴て土橋を渡、入江向制札前に札印を残、又土印より入江回入江底、大川尻、字片町に繋、制札前札印に繋、測所前入江出口沿海打止のキ印に繋。恒星測定		為石村止宿測所下より沿海測、二本瀬崎、瀬越崎、茂木村枝藤田尾名、ニッ岳崎(此所にて藤田尾人足不残迎去故、致方なく千々名へ行、昼休)、それより千々名の人足にて初る。黒瀬遠測、大瀬遠測、猿嶽川尻、千々名人家下、塩竈社あり、字平瀬崎に沿海打止。		手分。【永井他三名】柁島字京崎より右山測、左沖一ッ瀬遠測、白塔崎、白岳崎(白岳窟あり、又号穴とも云)、左沖桃瀬遠測、左沖龜瀬遠測、字針ノ耳、仁兵衛瀬遠測、五太夫瀬遠測、瀬尻崎、田平浜、唐船瀬遠測、里平浜、柁島人家下、字古町、右に浄土宗光明山撰取院、字水浦、字真浦、字新町、右引込鎮守松品大権現、字京崎に繋、柁島一周終。それより乗船。 【伊能他四名】脇御崎村字トイカヶ浜より左山沿海、仏崎、スシ鼻、字木場、川原村、字木場、岡ノ尾鼻、女池海辺にあり、又男池あり、猶大池なり、字宮崎(又池ノ浜)、川原本村、馬渡川、恵美須崎、為石村、為石川、止宿測所下に打止。恒星測定	特記・天体観測
二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	大図番号	



1 7		1 6				1 5	宿泊日・旧暦
( 10 )	中飯	( 9 )	昼休	小休	小休	( 8 )	(西暦)
長崎炉糟町	浦上村中里	長崎炉糟町	長崎村	長崎村枝本河内郷 字道幸	日見村枝河内坂下郷 字日見峠	日見村	宿泊地
同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	現・市町村名
禅宗大同庵	庄屋高谷重十郎	禅宗大同庵	庄屋森田貞六	百姓悦治郎	茶屋要右衛門	本陣馬駅、伝兵衛 御用取次松尾五郎七 文蔵	宿泊宅
飯香浦名出立。茂木村枝大田尾名人家下より沿 海順測、字古賀浦、字鼻操崎、字大名迫、字小 崎、日見村枝網場、字番所崎、字網代浦、左天 満宮社、左浄土宗日見山養国寺、字中河原、日 見川尻を歴て小出鼻の御用杭に繋。又日見川尻 より長崎街道へ打上、字浜底、字鳥打場、長崎 街道へ出、矢上村・日見村境、御料所界杭へ 繋。此より長崎街道を測。字腹切坂(右に馬頭 観音あり)、日見本村、長崎街道日見宿、日 見川石橋、測所前に打止。恒星測定		長崎逗留測。長崎市中大黒町限より時津街道 測、長崎村、字船津、長崎市中(飛地)西中ノ 町、浦上村山里、馬込郷の内字西坂、字御船 蔵、字町道、馬込郷、海辺より打上残に繋、右 引込松月庵あり、小川石橋、右一本松名高木 あり、字新馬込、里郷字花見坂、字山王宿、右 に制札、右に山王宮、別当白岩山円福寺、字坂 本、石橋、字宿ノ坂、平野宿、里郷、字左城、 字柳道、中ノ川大橋、中ノ郷、字辻、字浄福、 字塔ノ尾、家ノ川、字家ノ郷、左西川添川向、 直に浦上村西、字井ノ上、字中原、字城ノ越、 浦上北村、街道打止。それより浦上村中里へ引 帰、帰宿。忠敬西ノ御役所に行、出立並長崎 日々測量を届。				特記・天体観測	
二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	大図番号



宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号
22 *		(15)		下村		同 嬉野市		百姓市兵衛 儀兵衛		嬉野駅より長崎街道測、下村(止宿本陣前)、字小市場、市場川、塩田・武雄追分を歴て武雄道を測。三坂峠(郡界)、杵島郡北大草野村、長谷川、長谷分、宇土手村、枝二反田分、枝天竜庵分、袴野村、枝浦河内、越木川板橋、枝上矢分、内田村枝西覚寺分、枝大小路分、測ノ尾峠、西山村、峠脇に打止終。此夜晴天、帰宿遅刻、殊に近所嬉野測あるに付不測。		二〇一
21 *		(14)		嬉野駅		佐賀県嬉野市		本陣小簡屋喜兵衛 大村屋兵次郎		彼杵駅立。彼杵村・丹生川村界より長崎街道測、丹生川村枝俵坂分、口留番所、牛ノ塔坂、平野川、不動山村枝原口分、枝平野分、枝尾ノ上分、湯野田村、嬉野村嬉野宿、本陣測所前迄測。江戸行書状を出す。佐賀侯より一同へ御贈物あり。恒星測定		二〇一
20 *		(13)		同		同		同		逗留測。彼杵駅より制札角(重測)、此より長崎街道を測。御茶屋測所前、一ノ瀬川、枝瀧河内字松山、枝三根字上杉、枝樋口字谷口、二ノ瀬川、字四郎丸、字二ノ瀬、字菅牟田、字坂本、字峠、彼杵郡彼杵村・藤津郡丹生川村界打止。大村侯より一同へ着を被贈。		二〇一
19 *		(12)		彼杵駅		同 東彼杵町		本陣森又右衛門 和泉屋源吾		時津村立。乗船、海上五里、彼杵駅着。此夜大村信州老侯へ測量実測之儀を浜説。恒星測定		二〇一
18		(11)		時津村		同 時津町		本陣庄屋松尾七左衛門 福島屋茂一郎		長崎炉粕町立。浦上北村より時津街道測、浦上北村、右に口留番所、字東、字西、字中通、右の岩に六地藏と釈迦阿弥陀観音を彫刻す、枝岩屋、左に岩屋大権現一ノ華表前、引込岩屋岳の禁に本社有、平宗川、枝平宗、字百合畑、時津村字内坂、時津川、枝栗岩字野田、枝元村字丸田、枝元村、時津本村に繋。長崎より江戸書状届。恒星測定		二〇二
		小休		浦上北村枝平宗		同 長崎市		百姓茂一郎				二〇二



21		20			9月19日
(14)	昼休 外尾村	(13)	昼休 波佐見村	小休 東川棚字五反田	(12) 川棚村
岩谷河内村	佐賀県有田町	同 波佐見町	同 波佐見町	同 川棚町	長崎県川棚町
焼物屋八十右衛門	百姓善三郎	庄屋平岩仁左衛門	百姓熊治郎	百姓治右衛門	庄屋佐藤元右衛門
郷に繋。 り、有田川、曲川村字南河原、字乱橋、字黒 行。字原、字山（此所陶器製、即有田焼な 伊万里道追分迄測る。此より伊万里道へ繋 屋分、枝大野分、有田川渡、外尾村、武雄道・ 池、松浦郡外尾村、右に溜池、右に番所、枝鳥 横枕、波佐見川、字内ノ場、字岩峠、左に溜 川歩行渡、枝金谷字舞僧、枝折敷瀬字小熊、字 波佐見村波佐見川手前より武雄道を測。波佐見					
一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	二〇一	二〇一

【支隊】

24*		23*		宿泊日・旧暦
(17)	昼休 成瀬中宿	(16)	昼休 塩田町	(西暦)
芦原村枝新橋	同 武雄市	同 塩田町	同 馬場下村	宿泊地
同 武雄市	同 武雄市	同 塩田町	同 馬場下村	現・市町村名
本陣勝三郎（能家なり） 源右衛門	百姓宇兵衛	本陣弥平治 善七 平兵衛	丹生大明神境内	宿泊宅
道追分に繋終。恒星測定 六角川土橋（新橋と云）、志久村枝追分、武雄 良木分、枝西袋分、芦原村分枝新橋測所を歴て 迦寺分、成瀬村駅場、成瀬中宿、伊王寺村枝皆 村枝橋崎分、片白村枝立石分、枝今山分、枝野 ノ浦分（陶器を出）、枝銭亀分、杵島郡小野原 北古賀分、志田村枝志田原分、枝馬場分、枝提 塩田町脇城川端より、中久間村、下久間村、枝 追追分に繋終。恒星測定				
一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	大図番号

特記・天体観測



2 4		2 3		2 2				宿泊日・旧暦
( 1 7 )	小休	( 1 6 )		( 1 5 )	小休	昼休	小休	(西暦)
北方町	高橋村	武雄村湯町		西山村	永尾村枝西谷峠	鳥海村枝宿分	岩谷河内村枝上幸平	宿泊地
同	同	同		同	同	同	同	現・市町村名
武雄市	武雄市	武雄市		武雄市	武雄市	武雄市	有田町	
百姓庄七 庄兵衛	平九郎	神宮屋恵左衛門 漆屋勇助		百姓郡右衛門	茶屋熊十	百姓九郎太	笹屋政五郎	宿泊宅
武雄湯町立。河良村、長崎街道・唐津街道追分より長崎街道を測、枝間魔堂分、高橋村、高橋川土橋、枝町分、上滝村、北方町、北方川土橋、伊万野街道追分制札左角御用杭に繋。		西山村村字淵之尾峠より長崎本街道測、枝塔ノ原分、塔ノ原川、西山本村、皿山街道追分に繋、右田の中に薬師堂あり、左山上に観音堂あり、枝亀屋分、左引込山王ノ社、枝カンデョク、枝下分、武雄村枝湯町分、左に一向宗善念寺、三ツ辻、真直に本陣客屋あり、此所温泉湯壺六ヶ所、名湯也。右に制札、左馬駅場、通名塚崎、左に一向宗法林寺、妙林寺、西教寺、常念寺。右に同宗円樂寺、明宗寺あり、富岡村、八並村枝西浦分、河良村枝山ノ上分、枝石木分、甘久川、枝甘木分、枝久保分、唐津街道追分、長崎本街道打止。此より唐津街道へ繋。中野村枝原口分、右小山上に八幡ノ社あり、枝牛ノ谷口分、枝森園分、井戸川、川上村本村、三辻御用杭に繋。		岩谷河内村立。外尾村、武雄道・伊万里道追分より武雄道を測、岩谷河内本村駅場、岩谷河内川渡、枝中野原分、左禪宗永昌庵、岩谷河内川、枝神古場、枝赤絵町、右に十六善神社、右に法花宗法元寺、右に禪宗桂雲寺、枝本幸平分、枝白川分、右引込八幡宮、枝大樽分、枝上幸平分、左一向宗西光寺、枝泉山分、左弁天社、本村より此迄町並（人家続て、家六百八十三軒）、左字皿山（陶器の土を取）、杵島郡立野河内村枝狩立分、枝宮上分、枝寺下分、左田川の中に八幡社あり、狩川、枝樋口分、小河内川、枝平野分、三間坂村枝泉原分、左黒髪山参詣道あり、枝鶴原分、枝葭場分、鳥海村、鳥海川、枝宿分、永尾村、枝西谷峠、西山村枝西谷口分、本村人家入口、長崎街道へ出、追分に打止、皿山越横街道終。				特記・天体観測
一九〇	一九〇	一九〇		一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	大図番号



宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号	
【本隊】													
9月25日		【支隊】昼休		佐留志村		同		江北町		武兵衛		一九〇	
26 *		(19)		川上村		同		佐賀市		真言宗川上山實相寺		一八八	
27 *		(20)		西松瀬山村字三反田		同		佐賀市		本陣酒屋勝十 酒屋郡蔵		一八八	
28 *		(21)		三ッ瀬山村		同		佐賀市		本陣百姓要助 百姓市右衛門		一八七	
29 *		(22)		曲淵村		福岡県福岡市早良区		本陣庄屋重作 百姓伊三治 五三郎		神崎郡三ッ瀬山村測所前より、口留番所、枝峠新村分、杖立峠（又三ッ瀬峠共）、国界まで測る。怡土郡、左側飯場村（但、往来に小流あり、川を隔、右は早良郡曲淵村、左は怡土郡飯場村）、右側早良郡曲淵村、（小流を渡毎に郡替る）、曲淵本村人家前に打止、止宿打上。恒星測定		一八七	



29	28	27	9月26日	【支隊】 筑前街道坂本越手分		30*	宿泊日・旧暦
(22)	(21)	(20)	(19)	小休	国分村	(23)	(西暦)
市瀬村	五箇山村	小川内村枝大野分	坂本村	横田村枝河原分	神崎駅	田村貞島	宿泊地
同 那珂川市	福岡県那珂川市	同 吉野ヶ里町	同 吉野ヶ里町	同 吉野ヶ里町	同 神埼市	同 福岡市早良区	現・市町村名
庄屋与市 百姓宗右衛門	百姓善助 定七	幸治郎	天台宗背振山修覚院	百姓太兵衛	長崎屋武右衛門 綿屋善右衛門	本陣百姓大助 百姓権右衛門	宿泊宅
五箇山村より福岡道測、枝一ノ河内、砥石川、 字亀ノ尾峠、市瀬村、住毛川、那珂川飛石渡、 左に山王社、市瀬村本村人家人口にて打止。	守山ノ神社、五箇山村止宿下に打止。 川、又筑前国五箇山村枝大野、那珂川、左に鎮 川渡、肥前国坂本村、小川内村枝大野分、界 本村、又又界川を渡、又筑前国五箇山村、又界 村、小川、肥前・筑前国界、又肥前国神崎郡坂 坂本村より筑前福岡道を測。背振越（又坂本越 とも云）、右に口留番所、筑前国那珂郡五箇山 村、小川、肥前・筑前国界、又肥前国神崎郡坂 本村、又又界川を渡、又筑前国五箇山村、又界 川渡、肥前国坂本村、小川内村枝大野分、界 川、又筑前国五箇山村枝大野、那珂川、左に鎮 守山ノ神社、五箇山村止宿下に打止。	坂本村より筑前福岡道を測。背振越（又坂本越 とも云）、右に口留番所、筑前国那珂郡五箇山 村、小川、肥前・筑前国界、又肥前国神崎郡坂 本村、又又界川を渡、又筑前国五箇山村、又界 川渡、肥前国坂本村、小川内村枝大野分、界 川、又筑前国五箇山村枝大野、那珂川、左に鎮 守山ノ神社、五箇山村止宿下に打止。	坂本村より筑前福岡道を測。背振越（又坂本越 とも云）、右に口留番所、筑前国那珂郡五箇山 村、小川、肥前・筑前国界、又肥前国神崎郡坂 本村、又又界川を渡、又筑前国五箇山村、又界 川渡、肥前国坂本村、小川内村枝大野分、界 川、又筑前国五箇山村枝大野、那珂川、左に鎮 守山ノ神社、五箇山村止宿下に打止。	神崎宿出立。無測、神崎郡田手村、長崎街道・ 背振道追分より背振道を測。横田村枝大塚、枝 導師分、枝河原分、弁才川、三津村、石動村、 弁才川、坂本村、弁才川にて打止。	小城町出立。無測。国分村、それより長崎街道 神崎駅に着。	曲淵村人家前より、往来道中央、曲淵村・飯場 村界。左飯場本村駅場枝田ノ頭、右側曲淵村字 石原、此より左右共早良郡曲淵村に成、竜峠、 金武村、峠より山上へ引上げ、対州壱州其外を 測、早良川土橋、四ヶ村、田村貞印を渡、此よ り田村本村内、貞島測所へ引上。貞印より、田 村本村人家前に打止。恒星測定	特記・天体観測
一八七	一八七	一八七	一八八	一八八	一八八	一八七	大図番号



2		1		文化10年10月	30		宿泊日・旧暦
(25)		(10.24)		(1813)	(23)		(西暦)
同		博多町		薬院村枝出口	片縄村		宿泊地
同		同 福岡市博多区		福岡県福岡市中央区	同 那珂川市		現・市町村名
同		客屋の屋敷主大賀甚三郎 預主藤井清治		庄屋治右衛門	庄屋佐市 百姓定吉		宿泊宅
博多町逗留。江戸へ書状を出、長州へ測量先触を出。柳川南里格治へ宿送にて書籍を返す。		【本隊】田本村人家前より、次郎丸村枝川原、有田村、原村、倉原村字逢坂、枝皿山(陶器を製)、倉原村内西新町(町並にて家数多)、三ツ辻追分迄測。それより無測、福岡城下を通、博多町へ着。		【支隊】片縄村より福岡道を測、左十六三郎天神社、枝観音堂、字妙見、老司村枝唐戸、野多目村、三宅村枝堂ノ原、左若八幡宮、枝矢台、右雑掌隈道、左古城跡(古野城と云)、塩原村枝潮煮塚、枝小森、野間村、高宮村、平尾村枝一本松、薬院村枝出口、上人橋、福岡市中、紺屋町、薬院町、城の外堀佐賀堀と云。薬院口、薬院門、万町に繋終。それより博多呉服町着。福岡城下にて恒星測定。		市瀬村より福岡道測、埋金村、四郎五郎川土橋、中ノ原川土橋、不入道村、古城跡猫峠城と云、山田村、左那珂川に添、川中に神功皇后築立の井手あり、右に伏見宮、右に竜の古城あり(安德帝岩門皇居の節、警固の武士置と云)、右に用水溝、旧跡裂田溝と云伝、那珂川渡、別所村字治郎丸、字松尾、右川向、安德村(旧跡安德台と云。安德帝の皇居と云伝)、右川向に安德村鎮守風早大明神社、字冠石(山添にあり)、西隈村、枝立花木、後野村、道善村字堂目木、枝恵子、片縄村枝熊添、枝内田、止宿入口に打止。	
一八七		一八七		一八七	一八七		大図番号



4				3		宿泊日・旧暦
(27)	【先手】昼休	【先手】小休	【後手】昼休	(26)	(西暦)	
赤間村	赤間村	大穂町	畝町村	青柳町		宿泊地
同 宗像市	同 宗像市	同 宗像市	同 福津市	同 古賀市		現・市町村名
本陣領主茶屋家番嘉十 新屋甚三郎	新屋甚三郎	又助	組頭久七	本陣城戸与三郎 森甚太郎		宿泊宅
<p>【先手】青柳宿出立。宗像郡畝町村・八並村界より赤間道測、右に月ヶ森池、左に旧跡金魚水(又曰大閣水)、枝許斐町、左に古城跡、許斐山(又曰金魚山)、大穂村、大穂川土橋、大穂町、右側野坂村、左側光岡村、左光岡村・右野坂村枝原町(立場)、左に恵美須社、右に天満宮社、左側曲村、宮田川石橋、左右曲村枝宮田、字宮田峠、左右田久村(一里塚あり)、字小峠、右側徳重村、(右計古城跡、縁ノ城山と云う)、陵厳寺村、赤間村(町並人家続)、止宿測所前(即、馬駅)、右に制札、左に領主の茶屋、左浄土宗受岳山法然寺、赤間町内木屋瀬・芦屋道追分に印を残。此より芦屋道を仕越(即巡検使街道)。左側陵厳寺村、左に溜池(寺田堤と云)、左に古城跡あり(宗像大宮司氏定居城と)、右側石丸村枝大浦、石丸村、右側武丸村、字郡界峠と云。遠賀郡上畑村内、街道にて打止る。恒星測定</p>				<p>博多町出立。手分。【跡手】無測、糟屋郡浜男村海辺より赤間街道測、下原村、(立花の古城大友貞載建、天正中。柳川立花氏の先祖戸次道雲籠居)、枝秋山町、右側原上村、左側上和白村、左右原上村、三代本村人家前、先手の残に繋。【先手】糟屋郡三代村より初、道端に地藏堂あり、並に飯銅水と云あり(大閣名古屋御出陣に、此水を吞せらるゝと云)、左右に一里塚有、左側計上府村、右側計小竹村、左右青柳村、枝神田、本川石橋、青柳町、右馬駅止宿前(制札)、街道にて打止。小倉より飛脚にて江戸表用状届。</p>		特記・天体観測
一八六	一八六	一八六	一八六	一八六		大図番号



8			7		6		5 *			宿泊日・旧暦
(31)	【後手】昼休	【後手】小休	(30)	昼休	(29)	【本隊】小休	【支隊】	(28)	小休	(西暦)
下秋月村高内	大力村内東畑	土居村	飯塚宿	勝野村枝小竹	木屋瀬宿	広渡村枝老良	長谷村	芦屋市場町	海老津村	宿泊地
同 朝倉市	同 嘉麻市	同 桂川町	同 飯塚市	同 小竹町	同 北九州市八幡西区	同 遠賀町	同 鞍手町	同 芦屋町	同 岡垣町	現・市町村名
本陣百姓徳右衛門 百姓李治 百姓又七 百姓源七	百姓甚右衛門	清五郎	脇本陣宮崎善兵衛 畑間小四郎	酒屋兵太郎	領主茶屋本陣家蕃源六 別宿家蕃甚三郎 大庄屋藤井藤平	善蔵	庄屋半助 百姓半吉	本陣儀屋市郎左衛門 蟬会所	百姓半右衛門	宿泊宅
<p>【本隊】芦屋村出立。川船に乗。遠賀郡猪熊村堤より、遠賀川縁木屋瀬道を測。古賀村、左計に古賀古城跡有り、遠賀川渡(測遠術にて得る)、広渡村、右堤下に八剱宮、枝老良、埴生村枝砂山(名所塔ノ松)、鞍手郡下大隈村、右に十五社の宮、左川中(中島と云)、小牧村枝金ノ手にて、別手と合測。</p> <p>【支隊】新延村枝島村より、右側計八尋村、新北村枝新町、田頭、中山村、右濁池、右金越原池、植木村、右牟田堤の池、植木本村人家限に印を残。此より若宮川端、芦屋測の方へ合測に行。小牧村内字今村、字カネノ手川端にて合測。又、植木村内印より、若宮川を渡(舟渡)、下新入村、木屋瀬川(渡)、木屋瀬村、木屋瀬宿入口、長崎街道へ出、追分碑に繫終。恒星測定</p> <p>木屋瀬宿出立。遠賀川乗船(船路、両手一同)、飯塚宿へ着。恒星測定</p> <p>飯塚宿出立。手分。【後手】無測、穂波郡瀬戸村字瀬戸鼻、長崎街道・秋月街道追分碑より秋月街道測、土居村、瀬戸川、右計に老松ノ社あり、土師村枝狩野、弓坂峠、弥山村枝君ヶ畑、先手の初に繫。それより昼休、大力村内東畑。【先手】穂波郡弥山村枝君ヶ畑(人家前)より、赤土坂、それより嘉麻郡泉河内村、七曲坂、白坂峠、夜須郡甘水村字白川、仏坂峠、下秋月村、枝高内(又河内共)迄測。それより秋月街道追分碑に繫。使者領主より贈の国産持参。</p>										
一八七	一八七	一八七	一八七	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	大図番号



		10	9			宿泊日・旧暦
( 2)	【先手】昼休	【後手】昼休	(11. 1)	【先手】昼休	【後手】昼休 【先手】小休	(西暦)
香春町	後藤寺村	猪膝町	大隈町	東千手村枝芥田	東千手村内千手新町	宿泊地
同 香春町	同 田川市	同 嘉麻市	同 嘉麻市	同 嘉麻市	同 嘉麻市	現・市町村名
本陣米屋源右衛門 博多屋勘助	武兵衛	本陣大庄屋猪膝平四郎	本陣酒屋喜左衛門 豊前屋長助 大屋儀作	百姓新治郎	百姓善平	宿泊宅
<p>手分。下秋月村枝高内出立。【後手】下秋月村追分碑より枝高内八町越を測。直に八町越峠、嘉麻郡泉河内村字檉畑、大力村字野鳥、字足原、大力川石橋、先手の初に繋、東千手村内千手新町昼休。【先手】嘉麻郡大力村、大力川石橋より、大橋、字紫原、東千手村字原、枝千手新町驛場、千手川石橋、右に一向宗宝林山西楽寺、千手川土橋、(右計引込)禅宗知福山千手寺あり)、字鳥越峠、枝芥田、芥川、西郷村、字煮土峠、嘉麻川渡中央界、大隈町驛場、左に制札、左引込、鎮守祇園社、止宿前にて打止。恒星測定</p> <p>大隈町出立。【後手】同所より、下益村、カモメ峠、上山田村、山田川土橋、枝猪ノ鼻国界、豊前国田川郡猪膝村字境谷、枝田尻、枝堂原、猪膝町(驛場)に繋。</p> <p>【先手】猪膝町(驛場)より初、左に一向宗密厳寺、石橋、右中津道追分、左天満宮の社、枝小園、金国村、糸村枝新所、糸川渡、字三ヶ瀬、池尻村、三ヶ瀬川土橋、枝盛安、後藤寺村、左蛭子宮、宮尾村、左上野道追分、枝平松、小川土橋、岩峠、上伊田村枝新町、左恵美須社、伊田川仮橋、(川上彦山縁川也。川下は筑前遠賀川。此より川下金田村迄、芦屋より船通行)、左山根に并城村岩窟二ヶ所、下伊田村枝鉄砲町、鉄砲坂、新所村枝浦野、新所川、下香春村、香春川、左上野通筑前追分あり、枝新町迄測る。此より香春の神社へ打上、一の華表、二の華表、神前迄測る(但香春岳の内の一の岳の裾に在)。神殿の後なる一ノ岳、保元年中より鬼ヶ岳と号す、古城跡なり。又枝新町より、豊後・日田道追分碑に繋。此より小倉道を測。香春町、左一向宗善竜寺、左に問屋場、左一向宗浄妙寺、左に山伏千手院、左浄土宗光願寺、止宿測所前打止。小倉侯より国産を被贈。恒星測定</p>						特記・天体観測
一七八	一七八	一七八	一八七	一八七	一八七	大図番号



1 3	1 2	1 1			宿泊日・旧暦
( 5 )	( 4 )	( 3 )	先手昼休	後手昼休	(西暦)
同	同	小倉城下	徳力村	呼野村	宿泊地
同	同	同 北九州市小倉北区	同 北九州市小倉南区	同 北九州市小倉南区	現・市町村名
同	同	本陣宮崎良助	庄屋勘左衛門	本陣原幸右衛門	宿泊宅
<p>大風。船頭より赤間ヶ関渡海ならずと申出に付、無據逗留。</p> <p>山本源助、福岡へ帰る。国図を貸す、外に村々差出帳の内を国図と共に江戸届を頼遣す。江戸表へ書状を出す。</p> <p>【先手】企救郡呼野村駅場より初、左に制札、石橋、小森村、市丸村、枝原、木下村枝西、新道寺村枝山ヶ坂、石原町村、高津尾村枝盲谷、徳光村、加用橋、枝古川、徳力村駅場、枝図理、枝紺屋ヶ原、守恒村枝植松、北方村枝新町、右へ曲は大里道追分、城野村、新村、三方追分碑に繋、九州測量済。それより無測、恒星測定</p> <p>【後手】企救郡呼野村駅場より初、左に制札、石橋、小森村、市丸村、枝原、木下村枝西、新道寺村枝山ヶ坂、石原町村、高津尾村枝盲谷、徳光村、加用橋、枝古川、徳力村駅場、枝図理、枝紺屋ヶ原、守恒村枝植松、北方村枝新町、右へ曲は大里道追分、城野村、新村、三方追分碑に繋、九州測量済。それより無測、恒星測定</p> <p>香春町立出。手分。【後手】香春町止宿測所より、下香春村、左に香春神社旅所あり、枝殿町、枝高座石寺谷、鏡山村、此居村往來より引込、鏡山神社の森あり。それより又東に、はき原とて小松原あり、其所に古墳あり、河内王の墓と云伝。万葉集に河内王葬豊前国鏡山歌あり、枝瀬戸、下探銅所村、枝大熊、探銅所町駅場、上探銅所村、左に古宮八幡社、枝天屋金辺峠、企救郡呼野村（駅場）、本陣原幸右衛門前、先手の初に繋。</p>					
一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	大図番号



# イザベラ・バードが携行した日本地図 についての考察

石川 清一

はじめに

明治維新（1867年）から間もない明治11（1878）年に来日したイギリス人女性探検家イザベラ・バードが携行した日本地図は、来日する2年前の明治9（1876）年にリチャード・ヘンリー・ブラントン（R・H・ブラントン）が編集作成し、英国トリブナー社から発行された地図である。イザベラ・バードはこの地図が大変役立ったと旅行記で述べている。

明治初期は江戸時代の長かった鎖国政策も終わり新政府による開国政策の下、欧米先進諸国の制度文化を急速に導入しはじめた時期である。近代測量にもとづく地図は、日本国内では明治維新直前の慶応3（1867）年に伊能忠敬の地図を元図にした「官板実測日本地図」の刊行などを除けば一般向けに多く発行されるのは明治中期頃からになる。イギリスではその頃すでに遠い東洋の国日本の地図が刊行され、一般の人が旅行等実用に使用していたことに驚き、加えてこのイギリス人の日本地図が一見して伊能忠敬の地図（以下伊能図」と呼称）に類似しているのに大変びっくりしたことが、この小文を書く契機となった。

私はR・H・ブラントン作成のこの日本地図は主として伊能図を元図に他の地図情報（特に内陸部等の）を加えて作成したと推定するものだが、ブラントンの地図について論究したものが少なく、更に調査検討を要すると考える。しかし、このよ

うな日本地図が、日本国内で一般向けに刊行される前の明治初期にすでに発行されていたことは、伊能図が実測による正確な地図であると評価されていたことを示す貴重な事実であると思う。

## 1 バードとブラントンのプロフィール

(1) 地図の携行者「イザベラ・バード」プロフィール  
イギリス人。ヨークシャー・パラブリッジ生。1831～1904年。72歳没。



イザベラ・バード  
金沢正脩『イザベラ・バード  
「日本奥地紀行」を歩く』より

## ・女性探検家

英国レディトラベラーの第一人者と呼ばれている。世界各地を探検（旅行）した。その旅行記・紀行文は高い評価を得ている。来日時期は明治11（1878）年5月。当時47歳。明治11年5月横浜に上陸後、東京から東北・新潟・北海道（蝦夷）を4ヶ月かけて従者1人を連れて旅行し、開国して間もない日本の欧米人未踏・未知の奥地の現状についての見聞や印象、文化、習俗、自然等を紹介したのは大変貴重であり、特にアイヌ民族の文化に深い関心を持ち、その習俗、生活風景の描写など紀行文は高く評価されている。なお、イザベラ・バードはこの後、京都・伊勢、大津など関西方面にも旅行し、同年12月横浜から離日。

なお、この奥地旅行は、金坂清則「イザベラ・バード鋭い観察力で日本の実相を記録した希代の旅行家」（公益財団法人ニッポンドットコム）の多言語ウェブサイトより）によれば、英国駐日公使パークスの要請、「外国人内地旅行免状」取得等や、各種の準備、現地への手配など、周到に用意された旅だった、といわれる。



イザベラ・バードの日本旅行ルート図  
金沢正脩『イザベラ・バード「日本奥地紀行」を歩く』より

## (2) 地図の作成者「R・H・ブラントン」プロフィール

イギリス人。スコットランド生まれ。1841（1901（60歳没）。灯台建設・築港技師。来日



時期2回。来日通算7年間ほど。  
1回目 明治元(1868)年  
当時27歳。約4年間滞在。  
2回目 明治5(1872)年。  
約3年間滞在。



R・H・ブラントン  
横浜開港資料館編「R.H. ブラ  
ントンの日本と横浜のま  
ちづくりの父」より

#### ・主な功績

明治の初期、日本の近代的な灯台システムの確立に貢献したことで、加えて横浜のまちづくりにも貢献したことで「日本の灯台・横浜のまちづくりの父」といわれている。

#### ・来日の経緯等

①日本政府が近代的灯台建設のため、英国に技術者の派遣を要請し、英国政府が人材を選定した結果R・H・ブラントンが選ばれ派遣された。

②主な役目は灯台を築造し、運営を指導することであったが、副次的に開港地の外国人居留地の道路修造等に尽力することになった。

③来日中には明治天皇に拝謁(明治4年11月)や、木戸孝允、佐野常民等明治新政府の要人とも交流があった。

#### ・その他

R・H・ブラントンの指導で、明治初期に建設され、現在も使用され続けている大吠埼灯台(千

葉県銚子市)、六連島灯台、角島灯台(いずれも山口県下関市)などが、令和2(2020)年10月重要文化財に指定された。(現在も使われている灯台を重文に指定するのは初めて)

## 2 伊能図との比較

先ず上の両地図を比較する。両図を見て大変類似している印象を受ける。(小サイズの画像では比較は難しいが)

### A、伊能忠敬「大日本沿海輿地全図 伊能小図」

伊能忠敬により、足かけ17年の歳月をかけた10次に及ぶ全国実地測量で作成され、大図214枚、中図8枚、小図3枚が成る(小図は3枚で日本全土を表す)。文政4(1821)年に完成し幕府に上呈された。本年は完成後200年になる記念すべき年である。

### B、R・H・ブラントンの「日本大地図」の概要

・イザベラ・バードが携行した日本地図  
・タイトル NIPPON (JAPANESE) 1876  
・編集者 R・H・ブラントン(英国人。灯台建設・築港技師)

・出版社 トリブナー社(英国)  
・出版年 1876(明治9)年

・大きさ 日本を2分割し、更に4枚にしたものの。4枚を張り合わせると縦151cm、横116cm。広げると日本全図になる  
・縮尺 126万7000分の1

#### ・その他 カラー印刷

同種の地図が横浜開港資料館に収蔵

## 3 伊能図を源流(元図)に作成したと考える理由

(1)地図の編集・作成者のR・H・ブラントンは、明治初期に日本政府の招請により英国から派遣され、日本の近代的灯台の建設・運営・指導のため来日した技師であり、日本文化にも関心が高く、明治元(1868)年から通算7年間に及ぶ日本滞在中に当時日本国内で流布されていた各種の地図について見聞、蒐集や多くの地図関係情報に接する機会があったと考えられる。又、ブラントンは明治政府高官(木戸孝允、佐野常民等)との交流もあり、望めば一般人以上に情報を得られる立場にあった。

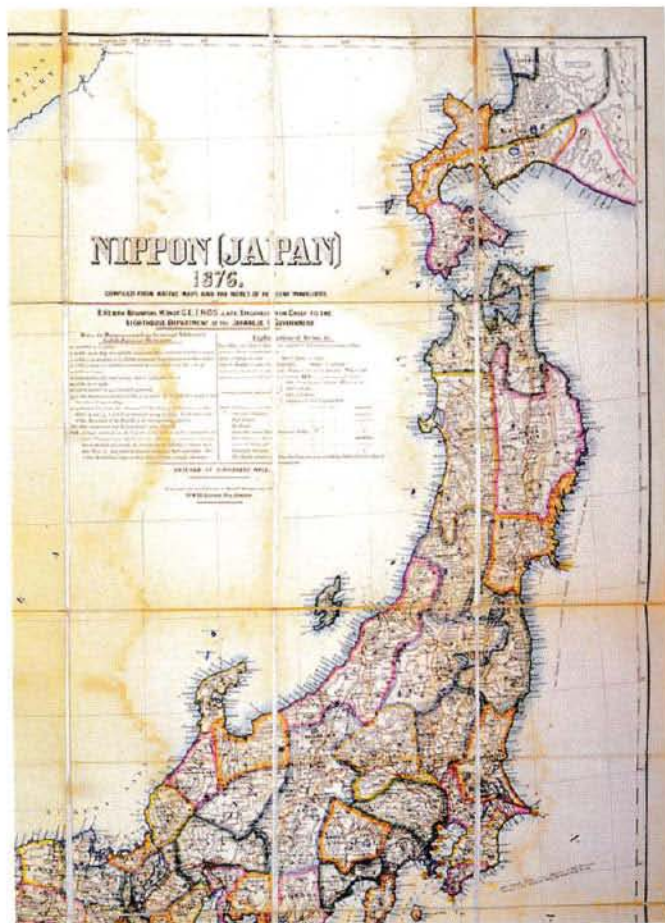
(2)R・H・ブラントン作成の「NIPPON (JAPANESE) 1876」の地図中央部にも、日本にあった地図を参考にしと記されているが、ブラントンは灯台建設の技師であり、職業に必須の三角測量技術などについて豊富な知識・経験を有していた。

日本では当時江戸時代から広く庶民に流通し、実用性も高かった長久保赤水の日本図(以下赤水図と呼称)など各種の地図があったが、実測による地図は伊能忠敬の地図(伊能図)のみであったことを考えると、ブラントンは主として伊能図を参考にして作成したと考えるのが自然ではないだろうか。

(3)R・H・ブラントンは来日する前の或る時期に、幕府が1861年にイギリス海軍に提供した伊能図を見る機会があり、伊能忠敬の存在と伊能図について知見を持っていたことも考えられる。(あくまで推定)

イギリスには、幕末の文久元(1861)年港湾測量の目的で江戸湾に来港したワード艦長率いるイギリス艦隊が幕府から提供を受け持ち





「日本大地図」 NIPPON (JAPAN)

R・H・ブラントン 1876 (明治 9) 年

金沢正脩『イザベラ・バード「日本奥地紀行」を歩く』より



「大日本沿海輿地全図」(伊能小図)

伊能忠敬 1821 (文政 4) 年東京国立博物館所蔵

帰った伊能図写があり(グリニッチの国立海事博物館収蔵)、更にイギリスはこの伊能図をもとにして3年後の1863年に大改訂した日本周辺地図を発行している。(改訂した地図の中の中央部には、「日本政府の提供した地図(幕府が提供した伊能図の意)に英国が蓄積した地図情報を加えて作成した」と記されている。)ブラントンはこれらの地図を見る機会があったかも知れない。(あくまで推定)

ブラントンの著書の中に、伊能忠敬とその地図(伊能図)について、強い関心を持っていたことがうかがえる注目すべき記述があるので、以下に抜粋する。

1869年(明治2年)4月、外国官判

事寺島(宗則)は日本帝国全土の測量の可能性について、私の意見を訊ねた。外固と条約を結んだ当時、既にこの国にはかなり正確な地図があったのに、この相談は不審でどのように判断してよいか私は迷った。日本に既にある地図はスケールが余りに小さく、したがって細部に欠ける所があるが、それでも河川の流れや山の輪郭や都市の所在地はかなり正確に記載されてあった。事実、海岸線の表示は非常に正確であったから、この地図はイギリス海軍省に海図として採用され、これを頼りにして艦船は航海したのである。

この地図は科学の原則とヨーロッパ諸国の現用の方法に基づいて、日本全図の作成に利用できるかと私には思えたので、私はしばしば報告書に引用した。日本を辞去する前の私の仕事の一つは日本の地図の資料を利用して縮尺1インチ(約2.54センチメートル)20マイル(約32キロメートル)の地図を作成する事であった。それによって町や村や河川、山岳、道路などを現在のものよりずっと大きく表示できた。

通訳の助けをかりて日本語で表示された名称はローマ字綴に直した。ローマ字の表示法は、当時世界中で日本学の第一人者と目されていたイギリス公使館の書記官E・サトウ氏の推薦する綴字法(ていじほう)によった。この地図は発行後、標準日本地図とみられ、欧米の各国政府の各部署や日本と貿易する商社などに広く購買された。日本内陸を旅行する者もこの地図の価値を認めた。

ミス・バードは彼女の著書『日本の未開発の地方(Unbeaten tracks in Japan)』の中で、この地図はよき案内書であったが、ときには失望したこと



もあつた、と書いている。

200年以上にわたつて長崎の出島に居住したオランダ商人や、彼らに付随した科学者は、ヨーロッパの最も洗練された言葉を通じて日本人の科学的思考力を豊かにした。これらオランダ人の（直接ではないが）弟子にピカル（フランス数学者）、日本のイノ・チュケイ（伊能忠敬）がいた。彼が地図作成の技術に秀でていたことは、彼の名を冠して呼ばれている日本最初の地図に表れている。

※（R・H・ブラントン著・徳力真太郎訳『お雇い外人の見た近代日本』十九 地図、測量及び技術者の養成』より抜粋。講談社学術文庫1986年）

#### (5) 結論

R・H・ブラントンがイギリスに帰国後、1876（明治9）年に作成・刊行した日本地図「NIPPON (JAPAN)」(来日したイギリス人女性探検家イザベラ・バードが携行した地図)は、彼の著書の記述から彼の灯台建設、築港技師としての職業上必須である正確な測量技術の必要性への理解が高いことや、伊能忠敬とその地図に強い関心を持っていたことがうかがえる等を総合的に考えた場合、R・H・ブラントンは当時日本で唯一実測により作成された伊能忠敬の地図(伊能図)を源流(元図)にして彼の地図を作成したと考えるのが自然ではないだろうか。改めて私の手許にあるR・H・ブラントン、伊能忠敬、両地図を比べると、小型版で細かな比較が難しく更に検討の必要はあるが、きわめて類似している印象を強くする。

#### 4 明治期に入り近代的日本地図を一般国民が入手出来るようになった時期について

(1)江戸時代には石川流宣の日本図や道中案内図などいくつかの日本図が作られ一般に利用されていたが、中でも安永8(1779)年に長久保赤水が作成した改正日本輿地路程全図(赤水図)は何度も改訂が行われ一般庶民に利用された。明治に入っても広く流布され、又ヨーロッパにも伝わった。

赤水図から42年後に伊能忠敬により作成された我国初めての实测による「大日本沿海輿地全図」(伊能図)が文政4(1821)年に幕府に上程されたが、その利用は幕府関係機関に止まり、一般国民の利用に供されることはなかった。又外国にも知られていたが一般国民にその存在が知られ、利用されるようになるのは後述のように明治維新後からであり、明治維新直前の慶応3(1867)年に幕府開成所から伊能図を元図に「官板実測日本地図」が発行されたのは注目すべき第一歩であった。

(2)明治政府により先進欧米各国の諸制度の導入近代化政策が推進され、地図についても西欧の測量技術に基づく近代地図の製作が進められる中で、前記「官板実測日本地図」や、文部省、内務省、陸地測量部などから伊能図を元図に作成した日本地図が多く刊行されるようになった。

#### (参考資料)

(2)このような状況から考えると、広く一般国民に近代的日本地図が入手出来るようになる時期は、諸説あるも文部省の小学校教科書にも載った明治10(1877)年頃以降と考える。(参考資料)

この頃すでに英国では遠く離れた東洋の国の日本地図が発行され、一般の実用に使われていた。おわりに

私が30歳から40歳頃、勤務先の転勤で青森県や山形県に各3年ほど勤務した折、地元の人々・新聞等にイザベラ・バードのことが時々報じられ多少知る機会があった。長かった江戸時代が終わり、明治に代わってまだ間もない明治11年、世の中はちょんまげや着物姿の人が多かった頃に、風俗習慣も異なる未知の国、日本の更に外国人未踏の地である東北、新潟、北海道(蝦夷地)を英国人女性探検家が従者一人を連れて旅行したことに大変驚いたことを覚えていた。

その頃は高度成長時代で、私も仕事に追われるサラリーマン生活を送っていたこともあり、それ以上の関心を持たなかった。改めてイザベラ・バードに関心を持ったのは、3年程前に偶然、金沢正脩著『イザベラ・バード日本奥地紀行を歩く』を読んでからで、その中に旅行で携行したという英国で発行された日本地図が載っており、一見して伊能忠敬の地図に大変似ていることだった。たまたま今年は春頃から新型コロナウイルス感染症予防のため、月に4〜5回あった定期的な各種の会合が極端に減り、現在一つを除きすべて中止になり単調な巣ごもり生活を余儀なくされている中で、ふとイザベラ・バードが携行した日本地図について少しまとめてみようと思いついた。調査不足等があるが、一読頂ければ幸いである。

#### 「参考資料」伊能図をもとにした幕末・明治の地図

明治初期の日本地図の大部分はいずれも伊能図



を参考にして作成している。(陸地測量部による正式な日本地図の測量開始は明治の中期からとなる)

(1) 官板実測日本地図

慶応3(1867)年に徳川幕府開成所から木版製で刊行。明治3(1870)年に同じ版木を用いて開成所の後身、大学南校から再版。文政4(1821)年版伊能小図をもとに、そのほかの資料を加えて刊行。

(2) 大日本地図

明治4(1871)年、川上寛作(信州松代藩出身開成所、大学南校、文部省勤務)

伊能図をもとに刊行された地図で、官板実測日本地図や伊能図の空白部分などを他の資料によって補い、近代地図にまとめた最初の地図。官板実測日本地図」の姉妹図といえる。

(3) 小学必携日本全国図

明治10(1877)年、高橋不二雄作(内務省地理局員)伊能図より編修された小学生向けの日本地図。縦99cm、横94cm

(4) 輯製20万分之1図

明治17(1884)年、陸地測量部製作。伊能中図をもとに他の資料で補訂して一般向けに発行された地図。

(4) 大日本全国

明治10(1877)年陸軍参謀局製作伊能図を参考にして作られたと考えられている。

(5) 大日本全国図

・明治13(1880)年、  
・明治16(1883)年 内務省地理局製作  
伊能図に基づいて作成したと明記されている。  
伊能忠敬研究会編集『忠敬と伊能図』1998年発行、アワ・プランニング社から

【参考文献】

○図録「鎖国時代・海を渡った日本図」

小林茂ほか編 大阪大学出版会2019年

○「シーボルトが日本で集めた地図」雑誌『地理』

付録古今書院 2016年

○「イザベラ・バード『日本奥地紀行』を歩く」

金沢正脩著 JTBパブリッシング2009年

○「イザベラ・バードの日本紀行」(上・下)イザベラ・バード著 講談社学術文庫2008年

○「イザベラ・バードと日本の旅」金坂清則著 平凡社2014年

○ツイン・タイム・トラベル「イザベラ・バードの旅の世界」金坂清則著 平凡社2014年

○「お雇い外人の見た近代日本」R・H・ブランドン著徳力真太郎訳 講談社学術文庫1986年

○「伊能測量隊まかり通る」渡辺一郎著 NTT出版1997年

○「イザベラ・バード旅の生涯」

0・チェックランド著川勝貴美訳 日本経済評論社1995年

○「図説・伊能忠敬の地図をよむ」渡辺一郎著 河出書房新社2000年

○日本史リブレット人「伊能忠敬」星埜由尚著 山川出版社2010年

○「忠敬と伊能図」伊能忠敬研究会編アワ・プランニング1998年

○「地図中心」一般財団法人日本地図センター2018年10月号 通巻553号

○「R・H・ブランドン日本の灯台と横浜のまちづくりの父」横浜開港資料館編 横浜開港資料普及協会1991年

伊能図完成200年を特集した雑誌

男の隠れ家  
ベストシリーズ

2021年

11月28日発行



城下町の秘密

近世日本の礎となった「伊能図」とは？  
大日本沿海輿地全図で旅する日本

歴史人

2022年1月号

2021年

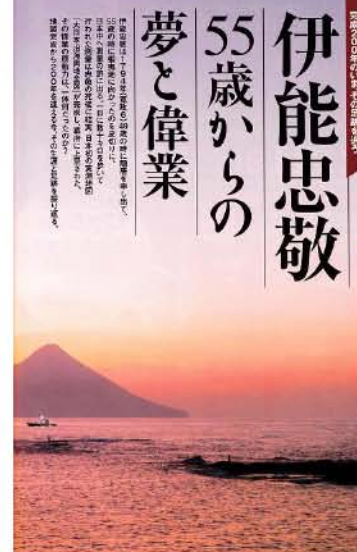
12月6日発行



伊能忠敬

55歳からの

夢と偉業





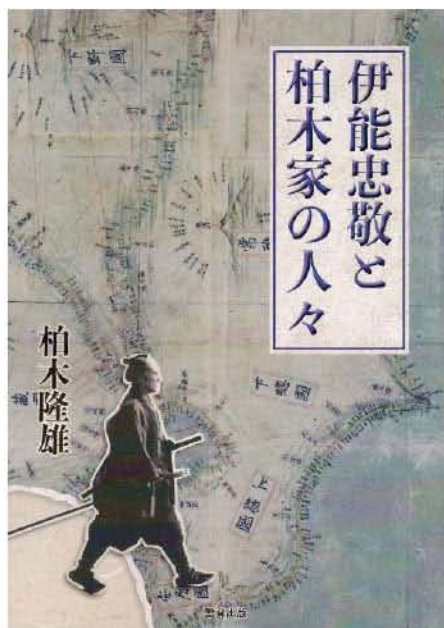


## 【書籍紹介】

## 柏木隆雄著『伊能忠敬と柏木家の人々』

星 梵 由 尚

伊能忠敬研究会の古くからの会員である柏木隆雄さんがこれまで蓄積されてこられた伊能家と柏木家に関するさまざまな資料をまとめられ、表題の書を上梓された。ご存知のように柏木隆雄さんは、伊能家から分かれ、伊能家の番頭としておそろく陰となり日向となつて忠敬を支えた柏木幸七の子孫に当たる方である。表題の書の著者としては、これ以上の方はおられないであろう。



本書の第1章から第3章まで、伊能家と柏木家との関わり、柏木家に残された古文書などの伊能忠敬関係資料について述べられている。特に、伊能忠敬が婿入りした伊能家の跡取り娘「達」が亡くなった後、内妻として忠敬に尽くした法名「妙諦」について、柏木幸七の娘であり、次男秀蔵と三女琴を残したことについて詳しく記しておられる。

秀蔵は、伊能測量隊の一員として第6次測量まで主要な隊員であった。後に忠敬から勘当されてしまい、伊能測量に貢献したにもかかわらず、不遇であったが、数学に優れた才能を持ち、晩年は、算術などを教えていた。秀蔵が詠んだ歌からその雅心を感じ取られ、庶子であったがゆえの境遇に、不憫を感じられていることが文章から伝わってくる。琴女についても、その御子孫の方との奇遇の縁なども記され、柏木家の誇りといったものが随所に感じられる。

柏木家に残された古文書などについては、柏木家の先祖書、シーボルト事件関係の古文書や近藤重蔵の「長崎之圖」、忠敬が持ち帰ったとされる「法隆寺絵図」などのことが紹介されている。絵図の来歴などについての法隆寺との遣り取りも紹介され、熱心な柏木隆雄さんの面目躍如たるところである。その他、慶長十三年の江戸図、司馬江漢の「地球全図略説」などについての紹介もある。

第4章は、柏木隆雄さんがこれまでに「伊能忠敬研究」などに書かれた随筆が掲載され、故佐藤嘉尚氏が作成された忠敬の年表が掲載されている。そして最後の第5章は、「伊能忠敬研究」に発表された小説「林蔵と秀蔵」で締め括られている。

以上のように、柏木家と忠敬との繋がりを中心に、柏木家に残された史料・古地図を紹介し、特に、内妻妙諦の係累が語られ、特に秀蔵に対する柏木隆雄さんの思い入れが感じられる一冊である。この書は、限定出版であるので、購入希望の方は、著者の柏木隆雄さんに直接申し込んで頂きたいとのこと。

B5判 135頁 価格1200円＋税  
2021年11月30日 発行

## 梶よう子著『藤岡屋由蔵「噂を売る男」』

大沼 晃

最近読みましたが、忠敬さんファンにとつて頭を休めることができる本と思いましたのでご紹介いたします。

シーボルト事件を題材にした歴史ミステリー小説で、情報屋の先駆け由蔵の周辺に起こるチョット物悲しく、ほろ苦く、奇想天外ドキッとする展開に心が弾み一気に読み進みたい内容です。



四六判 336頁 価格1980円（税込）  
2021年7月28日 PHP研究所 発行



# 近世佐原伊能家の記録「伝家」

玉造 功

このたび千葉県香取市の佐原古文書学習会では表題の史料集を刊行した。「伝家」は、題簽の後半が失われた文書で、家譜などと共に伊能家当主において所蔵されてきたものである。

忠敬の妻ミチの祖父にあたる伊能景利は近世初頭から享保十（一七二五）年までの佐原村の村政記録『部冊帳』『佐原市史 資料編』として公刊を残した。「伝家」は十四年後の元文四（一七三九）年に利根川中下流域の新田開発のために勘定奉行所の役人一行が佐原村に到着した際の対応の記録から始まる。同年中に佐原村は旗本四家の知行地から幕府直轄領に支配替えとなり、安永六（一七七七）年には六千石の旗本津田氏の知行所となった。「伝家」は忠敬が隠居する前年の寛政五年の記事で終わる。記録された内容は、佐原村の村政記録が中心であるが、伊能家の家政記録が含まれており興味深い記事も多い。



各解説史料には佐原古文書学習会代表の酒井右二氏による「大意と解説」を付して理解の一助とした。

下に示したのは史料と「大意と解説」の一例である。また会員有志による解説として「本史料を理解するために」を載せた。これは解説作業の中で各会員が関心を持ったテーマについて調査研究したものである。各タイトルは次の通りである。

- ・伊能家と永澤家 伊能楯雄・酒井右二
- ・江戸時代の堤防工事 — 御普請と自普請 — 堤 輝彦
- ・水と向き合う下利根川流域の暮し 小西則子
- ・伊能三郎右衛門家の女性たち 玉造 功
- タミとイシ、そしてリヨ —
- ・足尾銅山貸付金と佐原村の領主旗本津田氏 塚原芳久
- ・佐原村関係地図について 及川敏男

『伝家』の解説は二〇一六年五月から二〇二〇年二月までの四六回の月例会で読了した。この頃から、月例会で輪読した結果をワードや一太郎でデジタルデータとして記録するようにしてきた。その蓄積を研究資源として後世に残すため今回の刊行に至った。

佐原古文書学習会は一九七四年に発足し四十七周年を迎えた。発足以来、会を主導した故小島一仁氏は伊能忠敬研究会の初期のメンバーとして会報に健筆を振るわれた。また対象とする文書も伊能家文書とそれ以外の佐原村の古文書の二本立てで解説してきた。そのようなこともあって、古文書学習会の十八人のメンバーの中には伊能忠敬研

究会会員・元会員の伊能楯雄、及川敏男、玉造功、成家淑子、本郷靖枝の五名が加わっている。

寛政四年二月十四日 殿様方被下置候御墨付之写

一、三人扶持  
右者多年村方取  
其上手用向茂骨折  
出情候二付宛行之者也  
寛政四年

出立

出立

二月十四日 伊能三郎右衛門へ 永沢次郎右衛門へ

## 〈大意と解説〉

「伝家」の末尾は、寛政四年、前述した伊能忠敬と永澤俊順へ三人扶持が与えられた辞令の写しである。このことを特に重要視して末尾に配置していると思われるが、時系列では、寛政五年三月の旅立ちの記述で終了している。旅行から帰って、翌六年末に忠敬の隠居が領主旗本から正式に認可される。けれども、伊能家内部での実質的な代替わりは、この時点であったことが想定される。「伝家」は忠敬が当主であった時期と、その前代の当主が不安定な時期の記録である。婿入りした忠敬が、当家の運営のために必要とされたそれまでの前提的な情報や事柄、また、当主となった後の忠敬自身の業績を記録して、後代のために残したことになるのであろう。

## 入手方法

残部寡少ですが、左記までメールまたは葉書にて申し込んでください。

連絡先 代表 酒井右二  
(e-mail: migi1950@pb.ne.jp)  
住所 〒287-0003  
香取市佐原イ3385  
電話 0478-545674  
代金 送料込2000円



## 石川県支部だより

## 伊能忠敬 加能越を測る

—石川・富山 足跡探訪—

河崎 倫代

「伊能図完成二〇〇年」にあたる二〇二一年の年の瀬に、石川県支部では『伊能忠敬 加能越を測る』（A4判126頁）を自費出版した。



伊能測量隊が加賀藩領の加賀・能登・越中にやって来たのは一八〇三年（享和三）のことである。現在の石川県（海岸延長約五八四km）に三七泊、富山県（海岸延長約一四七km）に六泊して、全海岸線を測量した。

石川県支部では、二〇一四年（平成二十六）から数度にわたって、石川県加賀市から富山県朝日町までの測量隊の足跡をたどる現地探訪をおこなった。『測量日記』と伊能図を携えて、測量ルートをたどり、測線を確認し、

宿所・休所となった家を探した。宿所は天文測量の地だったからだ。伊能隊には申し訳ないが、私たちは全行程を車（一部、船）で移動した。探訪の詳細は会報に「加賀藩測量の足跡をたどる」というタイトルで連載したので、記憶している方もいらつしやるかと思う。

昨年一月、ようやく冊子化の作業に入った。会報記事の市町ごと再構成を寺口学・室山孝両会員と河崎で分担執筆、内容の詳細な検討・手直し、絵図・史料の再探索を室山会員と河崎が担当、史料編『伊能忠敬測量日記』（加能越関係）の翻刻等を室山会員が一手に担ってくれた。伊能大図と国土地理院地図の対比、休・宿所等の地図への記載、本文・写真・絵図等の複雑な割付作業は寺口会員がすべて担当した。お二人には大変な作業を黙々とやっていただき、感謝である。

こうしてようやく日の目を見た本書を、当初の目的を果たすべく、石川・富山両県の公立図書館に寄贈することができた。できるだけ多くの人が本書を手にして、教科書で学んだ歴史上の偉人が郷土の地を実測し、先祖がその作業をサポートしたこと、を具体的に知って、ふるさとの歴史に対する関心と理解を深める機会となってくれば嬉しい。特に、学校の先生方が本書を授業に取り入れてい

ただければ、児童・生徒たちは身近な歴史としての伊能測量を実感できるのではないだろうか。それを願って本書を思い立ったと言っても過言ではない。

なお、残部は一五〇〇円で希望者

川・富山両県の地域限定版であることをご承知おきください。  
※問い合わせ先  
伊能忠敬研究会石川県支部  
電話 〇七六―二六八―五七二五  
Eメール ishikawa@inoh-ken.org



## 石川県志賀町のページ

伊能中図（NCSHA所蔵）と地理院地図を対比させて、地理院地図には休・宿所の位置・月日を記載した。

に頒布する予定であるが、内容が石

## 目次

- \*はじめに・目次・凡例
- \*伊能忠敬の実像を求めて
- \*伊能忠敬の測量方法
- \*加賀・能登・越中測量のあらまし
- \*伊能忠敬測量隊のあしどりをたどる

【石川県域】  
【富山県域】

- \*伊能忠敬とふるさとの人々

西村太沖・石黒信由  
コラム

加賀藩ゆかりの「沿海小図」  
“城端天文学”の紹介

\*伊能図完成二百年展

金沢海みらい図書館で開催

\*伊能中図と『伊能図大全』

\*伊能忠敬と測量関係略年表

\*史料編

「伊能忠敬測量日記」

\*あとがき



# 石川県能登町で伊能図 上呈二百年記念の企画展

石川県支部 寺口 学

伊能図の幕府上呈二百年を迎えた二〇二一年十一月、石川県能登町の柳田星の観察館「満天星」で、企画展示「伊能図完成二百年記念 What's this? It's a 能登半島!」江戸時代に描かれた絵図・地図に見る「能登」を開催しました。「満天星」は、望遠鏡とプラネタリウムを備えた天文学の学習施設です。伊能測量隊が全国測量の中で、天文測量を実施していたこと、忠敬が地球の大きさを知ろうとしたがために、測量の旅を始めることになったことなど、天文学との深い関わりをもつことから、本施設での企画となりました。

展示品は三つに分けられ、最初に日本地図の歴史をたどるパネルと、江戸時代に流通した赤水図系統の原図（金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵）を展示。続いて、加賀藩の地図の歴史と地図作りを紹介し、越中の石黒信由に関連する能登の測量図（同館所蔵）も出品しました。

次に、企画展の中心となる伊能忠敬の生涯と測量についてパネル展示し、能登町における動きを詳細に解説。越中測量の際に忠敬に一時同行

した測量家石黒信由についても紹介しました。

この展示で最も関心を集めたのは、石川県部分の伊能大図のフロア展示でした。大図を詳しく観察することができるとあって、多くの来館者の目を引きました。この他、羅針盤（富山県射水市新湊博物館所蔵）や海上測量図（複製）なども展示し、能登での測量の様子に思いをはせていただきました。

最後は、能登に関する風景図や村絵図、海岸図を展示し、能登の風景を多様な形で楽しんでいただきました。そのほか、『東京国立博物館所蔵伊能中図大日本沿海実測図』（複製武揚堂）八枚をすべて展示、本会会誌などの関連書籍も紹介しました。

筆者による学芸員解説、石川県支部の河崎倫代氏による講座も実施し、多くの参加者を得ました。また、新聞やテレビでも紹介され、この企画展示を契機として、さらに伊能忠敬の足跡を知っていただく機会になったのではないのでしょうか。

最後になりましたが、伊能忠敬関係展示については、「能登さいはて資料館」（珠洲市狼煙町）の協力をいただきました。改めて、御礼申し上げます。



フロアに伊能大図複製、等身大の伊能忠敬像も



ロビーに伊能中図と御用旗を展示



伊能忠敬関連展示



学芸員解説の様子



## 映画「大河への道」

映画「大河への道」が5月20日に公開される。原作は、伊能忠敬研究会特別会員の立川志の輔氏。内容は志の輔氏の同題名の落語「大河への道」を映画化したもの。

伊能忠敬出身の千葉県香取市が地元振興を目的に大河ドラマ制作に向けてプロジェクトを立ち上げる。ところが、伊能忠敬は伊能図が完成する前に死亡していることに気がつく。伊能忠敬の死後、弟子たちによって伊能図が完成するまでの状況と大河ドラマ制作の苦悩をコメディ風を描く。映画に伊能忠敬は出てこない。

キャストは、中井貴一、松山ケンイチ、北川景子のほか立川志の輔氏も出演する。監督は中西健二、脚本は森下佳子。

伊能忠敬研究会は、伊能忠敬の測量方法の指導などで協力している。

映画の紹介サイト

<https://movies.shochiku.co.jp/taiga/>  
<https://eiga.com/movie/96077/>



## 新入会員の自己紹介

京都府 阿部野 剛

初めまして。京都市在住の阿部野剛と申します。

小学生の時に伊能忠敬の存在を知り、地図帳を眺めたり、積層模型を作ったり、地域の地図を模写したりといったことを楽しんでいました。

大学では土木を勉強し卒業後は、土木技術者として、地元の自治体で働いています。

実は研究会には約20年前に入会しておりましたが、当時の私には難解で2年程で退会しておりました。今年、伊能忠敬が隠居した49歳になったこと、7月に神戸市立博物館で開催された企画展を観て、改めて伊能忠敬の偉業に触れ、自分自身にフィードバックしたいと考え再入会させていただきました。企画展では、「作図の精緻さ」「技術的な価値」とともに「色彩の美しさ」を、当時の地名等を確認しながら、じっくり半日楽しんでおりました。

11月には初めて伊能忠敬記念館を訪れ、学芸員さんに「同等の測量（地図作成）は諸外国から一〇〇年程度遅れていたが、測量器具の製作、測量作図まで全て自国でやり遂げたのは、伊能忠敬（日本）のみであった」ことを教えて頂き、現代にも通じる日本

人の特性、つまり海外の技術を取り入れる素養の高さ、勤勉さ、粘り強さとともに、その後の我が国の歴史への影響を考えると改めて伊能忠敬の偉大さを感じることとなりました。

また、「日本地図の作成」は「正確な暦を作るため、正確な地球の大きさ（子午線の距離）を測るため」の副産物であったこと、その目的は第4次測量でほぼ達成されたのではないかと考えていて、その後の西日本測量においてどのようなモチベーションで進めていたのか疑問を持っています。諸説あるかもしれませんが、このような偉業は一人で出来ることではなく、部下を率いる実業家、マネージャーとしての素養の素晴らしさ、人間らしさにも触れてみたいと考えています。

どうぞよろしくお願い致します。



伊能忠敬展（神戸市立博物館）

山口県 石田 健治郎

伊能忠敬研究会の皆さまはじめまして、山口県美祢市大嶺町曾根中に住んでいます石田健治郎です。田舎の兼業農家の生まれで、大学卒業後、地元の会社に就職し、以来定年まで、稲作、山仕事、地域行事等を兼業で、企業戦士を勤めて来しました。現在、稼業の稲作を継承し、山田錦とコシヒカリを主力に日夜、奮闘しています。

さて、私が郷土史に興味を持ったのは、父が亡くなり、墓誌の見直しをしたことがきっかけです。そんな中、曾根集落の生活道が赤間関街道の道筋にあたることから、萩市明木宿から下関市吉田宿までの街道をつなぐ会が発足し、街道沿いの歴史を学びながら小学校の生徒達と歴史ウォークをしてきました。

私はガイドとしてかけだしです。第七次測量など伊能忠敬の功績、人間的魅力等を学んでいきたいと思えますので、ご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

## 訃報

神奈川県茅ヶ崎市の会員大八木照行さんが令和3年11月に逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。



# 伊能忠敬研究会会則

## 第1章 総則

第1条 本会は「伊能忠敬研究会」(THE INOH TADATKA SOCIETY)と称する。

第2条 本会の事務局は理事会の定めるところにおく。

第3条 本会は内外の伊能図と伊能忠敬事跡の調査研究を行い、伊能忠敬の実像を普及して社会に貢献することを目的とする。

第4条 本会はその目的を達成するため、つぎの事業をおこなう。

1. 研究発表会、講演会、見学旅行などの開催

2. 会報「伊能忠敬研究」の発行

3. その他本会の目的達成に必要な事業

## 第2章 組織

第5条 本会は次にあげる会員で組織される。

1. 伊能忠敬と伊能図に関連する分野の調査研究者・愛好家および伊能忠敬に関心のある個人または法人で、本会の活動を支えるため、会費あるいは賛助金を納入する一般会員、学生会員、特別会員。

2. その他理事会で承認する名誉会員。

第6条 本会に入会を希望する者は入会の申し込み後、第2条に定める会費を事務局に納入する。ただし、名誉会員は会費を免除す

ることができる。

第7条 本会の会員は次の特典を有する。

1. 本会の発行する会報等の配布を受け、本会の主催する講演会、研究会などの行事に参加できる。

2. 本会の発行する会報等に寄稿し、講演会、研究会で研究等の発表をすることができる。

第8条 本会の役員はつぎのとおりとする。

1. 理事12名以内、監事1名を置く。

2. 理事・監事は総会で選出され、任期2年とする。重任を妨げない。

3. 理事のうち1名を代表理事とし、理事会の業務を統括する。数名を常任理事として日常業務を分担する。代表理事に支障があつて職務を遂行できないときは理事会の承認により副代表または常任理事の1名が代表理事となる。ただし、任期は前任者の残存期間とする。

第9条 理事全員で理事会を構成してつぎの会務を行い本会を運営する。業務の一部を常任理事会に委任することができる。特別顧問、顧問及び監事は理事会に出席して意見を述べることができる。

1. 総会の議題、予算案、決算書等の提案

2. 会員の入退会の承認および除籍

3. その他会務の処理

第10条 本会は支部を置くことができる。支部の設置および支部規約

の決定は、理事会の承認を要する。

第11条 本会は会の業務運営のため、理事会の下に事務局を置き、事務局の構成員を常任理事とする。理事は分担して次のような業務を処理する。

1. 会員担当…会報の発送、会員への諸連絡

2. 総務担当…会員の入退会、会費の請求、経費の支出記帳、総会、理事会の議事録作成、会員名簿の作成

3. 編集担当…会報の編集発行、その他関連資料の編集発行

4. 行事担当…総会、例会、講演会、懇親会など行事の催行

理事会は必要によりこれ以外の委員等置くことができる。

第12条 監事は、各年度における理事会の業務ならびに会計の監査を行い、総会で報告する。

第13条 本会に名誉代表、副代表、特別顧問、顧問、幹事を若干名置くことができる。

## 第3章 総会

第14条 総会は全会員で組織し、本会の最高の議決機関とする。総会は代表理事が招集する。議長は総会で選出する。

第15条 定期総会は毎年招集し、つぎの事項を議決する。

1. 会則の変更 2. 予算・決算 3. 年度行事計画と報告 4. 役員の出  
第16条 総会の議決は、出席会員の過

半数を以て行う。可否同数の場合は議長の裁定による。

## 第4章 会計

第17条 本会の経費は、会員の会費、賛助金、その他を以て充てる。既納の会費は途中退会しても返却しない。

途中入会の場合は、当該年度の会報を一括送付して、当年度会費に充当する。

1. 一般会員 会費 5千円(年額)

2. 学生会員 会費 3千円(年額)

3. 特別会員 賛助金 2万円(一口) 会費を滞納した会員には納入を催告する。2回催告して納入されない場合は特別な場合を除き除籍する。

第18条 本会の会計年度は4月1日より翌年3月31日までとする。

## 第5章 付則

第19条 本会の会報編集基準、投稿規定は別に定める。

第20条 本会の会則変更は、理事会の提案により総会で議決するものとする。

第21条 本会の会報は「伊能図探究」を継承し第7号から発行している。

第22条 本会則は、平成10年(1998)9月12日から施行する。

1999. 5. 8 一部改訂  
2004. 12. 12 一部改訂  
2014. 6. 21 一部改訂  
2019. 6. 2 一部改訂



## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。  
\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（724字×三段または888字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

### ②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

\*印刷サイズが100mm×75mmで350dpiのカラー写真の場合、1153前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。

デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判（27mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPG形式またはTIFF形式）にしてください。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り上がり見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくはホームページ <http://www.inoh-ken.org/> を参照）

### 送り先

・電子メール添付の場合 [kaho@inoh-ken.org](mailto:kaho@inoh-ken.org)  
・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って会誌及びホームページ掲載の許可を取っておいてください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。本誌に掲載された記事の著作権は、伊能忠敬研究会に帰属することとします。他誌等へ転載する場合は、事務局に連絡して許可をとってください。

次号（第97号）は2022年6月発行、原稿締切は4月30日です。

皆様の投稿をお待ちしております。

## 伊能忠敬研究会 入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方とはどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

### 三、入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

### 四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）

事務局メール [mail@inoh-ken.org](mailto:mail@inoh-ken.org)

郵便振替口座 〇〇ー五〇六〇七二八六一〇

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

### 編集後記

◇昨年は伊能図が完成し、幕府に上呈されてから二〇〇年目の節目に当たり、伊能忠敬が測量の基点とした、東京都江東区において式典や地図や測量機材の展示、測量体験、講演会、記念落語会といった行事が催された。◇雑誌やテレビ番組などでも伊能図完成二〇〇年が取り上げられた。◇本誌でも前号の95号で特集を組んだが、これ以外にも会員諸氏が主体的に関わった書籍が昨年末に複数上梓され、本号の書籍紹介と石川県支部だよりで紹介されている。◇二年間続いたコロナウィルス感染拡大で、年に一度の総会も資料の郵送による審議となった。◇そんな状況下ではあるが、昨年の総会では役員改選が行われた。◇新たに理事に加わってくださったのが、井上理事と堀野理事である。井上理事は九州支部の支部長でもあるが、今号から本誌の編集にも参加していただいている。◇コロナウィルスによる影響は、マイナス面が大きいことは言うまでもないが、一方で、インターネットの利用拡大ではプラス面が大きい。◇本号の編集に九州からご協力いただけたことは、今後の会の運営方法に新たな道を拓くことになるかと期待している。（H）